

●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 11-8

中学受験

目次

| | |
|-------------------------------|---|
| 子ども研究ノート（その7） 昭和初期の中学受験 | 2 |
|-------------------------------|---|

調査レポート 中学受験

| | |
|------------------------|----|
| 要約 | 8 |
| はじめに | 12 |
| 1. 受験生のプロフィール | |
| ● 受験生の割合 | 13 |
| ● 受験生の自己像と考え方 | 15 |
| ● 受験生の未来像 | 18 |
| 2. 受験生の生活 | |
| ● 受験生の学校生活 | 21 |
| ● 受験生の睡眠時間 | 25 |
| ● テレビやマンガとのかかわり | 27 |
| ● 受験生の遊びと勉強 | 28 |
| ● 学習塾と受験生 | 31 |
| ● 家庭教師と受験生 | 36 |
| 3. 合否の差異を求めて | |
| ● 合格者のプロフィール | 39 |
| ● 合格者の学習状況 | 43 |
| ● 受験を通しての経験 | 45 |
| ● 合格者の未来像 | 48 |
| まとめに代えて | 50 |
| 資料1 調査票見本および集計結果 | 51 |

*おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。



子ども研究のひと (その7)

昭和初期の中学受験

静岡大学教授

深谷 昌志



●筆記試験の廃止

本号では中学受験を考えようとしている。小学生の受験などという、ここ数年の傾向のように思いがちだが、歴史をひもとくと、それぞれの時期に受験があったのに気づく。そこで昭和初期の旧制中学受験をめぐる動きを紹介してみたい。

昭和2年11月、文部省は中学校令施行規則を改正し、「中等学校試験制度改正ニ関スル件」の通達を発した。これは、「入学者ノ選抜ニ試験ヲ行ハザルヲ本トシ、主トシテ出身小学校ニ於ケル成績等ニ拠リ、更ニ人物考査並身体考査ヲ行ヒテ之ヲ決定」することを骨子としている。つまり、従来の入学試験の名称を、入学考査に変えると同時に、いわゆる筆記試験を全廃して、内申書と人物考査（口頭試問）身体検査の三本立てで、入学者を選抜しようというのである。

文部省の通達を受けて、各県でも筆記試験の廃止に踏み切り、身体検査はともかくとして、内申書と人物考査の結果とを参照として、

選抜を行う体制を固めた。

このうち、もっとも難しかったのは、内申書の構成で、千葉県を例にすると、「学業成績、身体状況、小学校長の所見、家庭の状況、その他の特記事項」がもらえることになった。

なお、学業成績については、

イ 各教科ノ成績ハ 甲上 甲下 乙上
乙下 丙上 丙下 丁 ノ評語ヲ
以テ表ス 附 授業日数 欠席日数
ヲ附記スルコト

ロ 当該学級ニ於ケル席次（何組 何人中何番）、但同一順位ヲ附セザルコト

ハ 当該学級ニ於ケル各教科ノ成績分布表（『千葉県教育百年史』第4巻）

とし、6年生の2学期のものを記載することとした。

また、人物考査の実例として、青森中学で実施された出題を紹介すると、表1のとおりである。

このうち、4までが1日目、5以下が2日目の出題で、定員が200人のところに、390人





の志願者があったため、結局、1人当たりの口頭試問の長さは、数分程度だったと言う。
（『青森県教育史』第4巻、資料篇2）

●入試問題の発生

筆記試験を廃止し、内申書を重視するという選抜制度の導入は、むろんたんなる思いつきで始まったことではなかった。

そこで、簡単に日本の入試制度を概観しておくことにしたい。周知のように第二次世界大戦まで、大別すると、小学校卒業後受験する旧制中学・高等女学校の入試と、中学卒業後、高等教育へ進む者が受ける旧制高校などへの入試との2段階のステップを追って行われた。このうち、旧制高校の入試は、エリート選抜の意味を持つだけに、すでに明治20年代後半には、一高、三高を中心に激しい入試の様相を示し始めている。しかし、高校の定員は一高から八高までを含めても、全国で

2,000人（明治40年代まで）程度にすぎず、中学進学すらまれな時代だけに、高校入試はほんの一握りのエリートのための入試で、庶民との接点をほとんど持ち得なかった。

もちろん、中学受験についても限られた層の中での入試という状況に変わりはない。例えば、明治35年に中学（高等女学校などを含めて）受験者は、全国で5万2,000人。合格者は3万2,000人である。これをこの年次の子どもの数96万2,000人と対比させると、中学入試に参加できた子どもは3.8%、合格できた子どもは1.6%という計算になる。また、明治42年に例をとると、94万5,000人の子どものうち、中学受験者は5万8,000人（3.3%）、合格者は3万1,000人（1.9%）である。

旧制中学の成立についての詳細は教育史にゆずらざるを得ないが、全国的な規模で、中学校制度が確立されたのは、森有礼文相が中学校令（明治19年）を發布し、各県に1校の

表1 出題例

- 1 どうして中学を志願しましたか
- 2 ふだん偉いと思っている人は誰ですか
- 3 あなたの着ている着物の原料は何ですか
- 4 日本で一番尊い神社は何神様ですか
- 5 日本の国旗にはどんな意味が含まれていますか
- 6 釈迦はどこ生まれで、臨終の時にどんなことをいいましたか
- 7 2で割り切れる数を何といい、それらの数をどうみわけたらよいのですか
- 8 計算の暗算 $8 \times 3 \times 5 \times 6 =$
- 9 水に棒を入れるとどう見えますか
- 10 何が雪になりますか
- 11 天皇の誕生日、第何代か、即位の御大礼をいつどこで行なうかをいいなさい





中学を作るよう定めた以降である。その結果、水戸弘道館の流れをくむ水戸中、旧彦根藩主が財源を支えた彦根中など、旧藩学の遺産を継承できる県では、それを受け、その他の県は、師範や私立校の転用を図るなどの形で、東京府立一中（現日比谷高）、福島中、奈良中、千葉中など、主として県庁所在地の名前をつけた中学が設置されることになった。しかし、県庁所在地だけでなく、県下の主だった都市でも、中学を設立したいという要請が強く、中学教育の普及の意味もあって、明治26年から、県下で複数の中学が設置されることになった。

それでも、すでに触れたように、中学受験に参加できた子どもの割合は3%前後にすぎなかった。しかし、受験者の割合が少ないからと言って、入試がやさしかったわけではない。東京府立一中に例をとれば、明治42年は入学者154人のところに、受験者が1,005人で、6.5倍の入試倍率に達している。しかも、明治45年7.9倍、大正4年8.8倍、大正7年9.8倍（東京府立一中『創立50年史』）と、年を追って、入試倍率は増加の一途をたどった。そうした影響を受けて、明治30年代まで入試倍率が2倍弱であった東京府立三中でも、明治42年2.5倍、45年3.7倍、大正3年4.0倍と難関校の1つとなり、現役入学率が7割、逆に言うと、高等小学校に入るなどのいわば一浪してから入学者が3割に達した。（大正5年『東京府立三中一覽』）

特に、大正年間に入ると、高等女学校も含めて中学教育への人気が高まり、

| | 中学校数 | 中学入学志願者 | 入学者 |
|-------|------|---------|------|
| 大正6年 | 329 | 8.1万 | 3.8万 |
| 大正9年 | 368 | 12.3万 | 4.7万 |
| 大正12年 | 468 | 15.6万 | 7.0万 |

と、学校数と定員を増やしても、受験者増に追いつかない状況を迎えた。中でも、森有礼

文相下で設置された有力中学への入試は、より一層激化の様相を示し始めた。

●受験勉強のありさま

そうになると、当然のことながら中学入試のための受験勉強が始まる。何人かの自伝の中から、そうした勉強のありさまを紹介してみよう。

「小島塾へ通って、数学はほぼ安心だったが、父はそれでも不安をもち、12月から、やや泥縄的だが、国語の勉強に別の塾に通わせることにした」（大正6年京都府立一中入学、桑原武夫『思い出すこと忘れえぬ人々』）

「受験勉強は前年の夏頃から受け持ちの鈴木先生が放課後、毎日2、3時間、中学へ入学を希望する生徒10人ほどを集めて教えてくれた」（大正9年成蹊学園入学、岸井良衛『大正の築地っ子』）

「受験期日が迫ると、同級のT君といっしょに、S先生（担任）の下宿へ週に2回か3回、勉強を見て貰いに通った。数学と国語の問題を選んで貰い、前の晩おそくまでかかって作った答案を見て貰うだけだが、とにかく個人教授を受けるといことは、安堵感がある」（大正10年青山学院入学、大岡昇平『少年』）

「秋頃になると、さすがに自分ひとりで自習しているだけでは不安だというので、藤原先生の家へ通うことにした。（ここは、退職した先生が自宅で開いている塾で）中学に進学する子が少ない上に、わざわざ習いに通う子は一層少なかったからで、私を入れて4、5人だった。だから、部屋も4畳半の茶の間で、火鉢のそばに机が一つあるっきり」（大正11年東京府立一中入学、村上信彦『大正・根岸の空』）





こうした記録を手がかりにすると、補習、あるいは塾通いなどの形で、すでに大正時代、中学を受験する子どもたちが、受験勉強に追われていたことがわかる。

それでは具体的に当時の試験問題は、どの程度だったのか。大正4年、千葉中学の試験問題を紹介しますと、以下のとおりである（出題は6問）。

$$\textcircled{1} \left(9 + 8\frac{3}{7}\right) \times \left(3\frac{7}{12} - 2\frac{8}{15}\right) + 15\frac{1}{4}$$

③人力車にて或両村の間を往復するに其賃銀一里につき、往には25銭、復には17銭なり。此割にて一度往復の車賃1円26銭を払ひたりとすれば両村の距離何程なのか

⑤甲乙二人の職工あり。或工事をなすに、甲は9日を要し、乙は18日を要す。甲乙二人が同時に此仕事にかかりて其一を仕上くるには幾日を要するか

また、千葉高女の算数（大正8年）の試験問題は、以下のとおりである（出題は7問）。

$$\textcircled{1} (263279 + 322346) \times 3.4 \div 46.85$$

⑤周囲百二十メートルの池の周囲に二間毎に桜の苗木を植うるには苗木幾本を要するか

⑦或入金三百円を八ヶ月貸し利息12円を得たり年利何程に当るか

植木算や流水算、鶴亀算、旅人算などのいわゆる文章題がオンパレードの感のする出題傾向である。しかも、千葉中の場合、90点以上をとった者が13%を占めたというから、上記に紹介したような問題をほとんど正解できないと合格はおぼつかない。となると、通常

の授業だけでは中学合格は不可能になるので、補習や塾通いが隆盛することになる。なお、千葉高女の国語の出題文の1つは、

「志士仁人は生を求めて仁を害することなし。身を殺して仁をなすことありとか義を見てせざるは勇なきなりいでや臨幸の路次に参り会ひ君さうはひ奉りて義勇を起し名を伝ふべし」

であり、書取問題は、

セイケツ、ヨキヤウ、テイバウ、モハン、フクザツ、オウセツ、カクゴ、フハイ、サイバイ、ゴカイ（原文のまま）

のとおりでである。

当然、出題のレベルが高すぎるとの批判も加えられたが、これに対し、中学サイドから、くりかえし、出題のレベルは「小学校本来ノ教育方針ニ準提シタルモノ」（大正13年佐原中学）との説明がなされている。しかし、出題を見るかぎりあまり説得力を持つものではなかった。

こうした受験勉強のありさまは、小学生が対象であるだけに、社会的な関心を集め、各県でさまざまな対応策の検討が行われている。例えば、三重県の場合、小学校校長会や県会で、中学の増設や抽せんによる入試方法の導入などと並んで、準備教育の禁止が論議されている。

しかし、県当局は準備教育を形式上禁止しても、私塾が増え、経済的に豊かな家庭の子どもが有利になるとの判断をくだし、禁止処分はとらなかった。しかし、準備教育の過熱状況を放置できないので、大正14年訓令を発





し、

- 1 6年生に限り、始めは週2～3時間、入学前でも、週6時間を限度とする
- 2 日曜、祝祭日の補習は禁止する
- 3 私宅での補習は禁止する

などの歯止めをかけると同時に、受験勉強の弊害を除くために

- 1 入試科目を試験直前に発表する
- 2 口頭試問を重視する
- 3 出題数をふやすと同時に、暗記ものをへらし、考える力をためす問題を選ぶ（『三重県教育史』第2巻）

などの指示を出している。

●筆記試験の復活

しかし、そうした対応では、入試の過熱化にブレーキをかけることができなくなり、その結果、文部省は冒頭で触れたとおり、昭和2年に筆記試験の廃止と内申書と口頭試問重視の選抜方式へと踏み切るようになった。

そうはいつでも実際に、入試のやり方を変更してみると、また新しい問題が生まれてくる。まず、口頭試問については、望ましい方向といっても、現実に生徒ひとりひとりに費やせる時間が少なく、十分な面接ができないうえに、面接者が異なるので、公平な採点を行にくい。加えて、子どもたちも前もって面接の練習をするようになるので、型にはまった答えをするようになる。（小学校校長談、朝日新聞昭和3年5月）また、内申書は「学校によって成績の考査の標準が異り、学校自身に差異がある以上成績の判定は頗る困難」（青森県福士視学官談『青森県教育史』）なように、小学校格差により内申のレベルが異なる問題が生ずる。さらに内申書をめぐって、子どもたち同士の競争が激しくなり、加えて、校長が自校の子どもに有利なように内申書にげたをはかせるなどの手を加えたりするので

記録に全面的な信頼を置きにくいなどの状況が生じ始めた。

そのため、文部省では昭和4年、以下のような次官通達を発し、「試験の弊を矯むるに急にして内申万能の弊に陥るものがある之が為に間々一種の情実が行はれんとした痕跡のあるは頗る遺憾とする所である」と触れた後、「小学校校長の報告のみに従って之を決定」するのでなく、「小学校校長より提出する報告を十分参酌する」と同時に、「急速な準備教育を施しても何等の効を奉せざるが如き材料」を用いた「平易なる筆記試験」の実施を認めることにした。

この間、小学校のサイドから、これまでと同じように内申を尊重するようにとの声がある一方、中学校からは筆記試験賛成の意見が強く、両者の意見は鋭く対立した。そうした事情を反映するかのよう、昭和2年から3年にかけて、主要な教育雑誌は何回にもわたって入試特集を掲載している。

しかし、結果としては、次官通達は筆記試験の解禁を意味したので、それ以後、ふたたび、入試が実施されることになった。

昭和8年に刊行された『岩波講座・教育科学』第16冊に、「入学試験の問題シンポジウム」が収録されている。提案者は東京帝大の岡部彌太郎で、これに田中寛一や三輪田元道など、当時の一線級の教育研究者や実践家加わる形のシンポジウムである。

さすがに、大正から昭和にかけて、入試の問題をめぐり試行錯誤の歴史をたどってきただけあって、ほとんどの参加者は、岡部提案の基調となった、

- 1、入試問題を解決できる唯一万能な方法はない
- 2、解決法は多様でなければならない
- 3、多様の中に指導的な原理がなければならない





に、賛意を示している。ただ、具体的な対策として、岡部が抽せん制を提案したのに対し、その他のバネラーから

- 1、メンタル・テストを導入する
- 2、1回だけの試験でなく、入試を、なん回か実施する
- 3、学校により、入試科目を変える
- 4、内申は信頼できないから全廃すべきだ

などの主張が寄せられている。原則をふまえながらも、具体策となると、意見が分かれるのであろう。

ただ、この中で、三輪田元道がこれらの方策は、いずれにせよ便法にすぎず、結局は教育を「平等原理」でとらえるか、「競争原理」を認めるのかの態度を決めない以上、抜本的な解決はあり得ないと指摘をしているのは注目に値しよう。

この討論が行われたのは、今から半世紀前

の出来事である。しかし、塾通いのさかんな現状を考えると、半世紀前に提起された問題が、今もって解決されていない感を抱く。特に、中学受験をめぐる昨今の動向は、昭和の初めに旧制中学受験について試行錯誤した過程と重複している部分が多い。しかし、昭和の初めと比べれば、大学進学熱も高まり、生涯学習への気運もさかんだ。それだけに、どの中学に入れたかはそれほど大きな重みをもたないはずなのに、私立受験は過熱するばかりである。

子どもの成長をマクロにとらえ、子どもに子どもとしての時を過ごさせるのが可能になったのが現代だと思うのに、以下に触れるデータをみると、子どもをめぐる状況は一層悪化している印象を受ける。

〔深谷昌志『子ども考現学』（福武書店）の「入学試験」を加筆、補筆したものである。〕



調査レポート 中学受験 要約

静岡大学教授 深谷昌志
横浜市立鳥が丘小学校教諭 戸塚 智

1. 受験の有無

本サンプルの場合、中学受験をした者は41%である。(図1)

2. 自己像の開き

受験生と非受験生とで自己像にそれほど大きな開きは認められないが、受験生は勉強ができると思っている割合が多い。(図3)



3. 受験生の未来像

受験生の44%（非受験生は13%）は、むずかしい大学への進学を考えている（表2）。そして、医者や裁判官、大学教授へつきたいと思っている子が多い。（表3）



4. 受験生の学習態度

先生の話をもじりにきき、授業中自分から手をあげて積極的に勉強している子が多い。（図7）

5. 受験生の生活態度

テレビを見るのをがまんし（表5）、マンガを読むのをへらし（表7）、友だちと遊ばずに（表8）、4時間近く勉強している子が多い。（表10）



6. 学習塾通い

受験生の94%が塾通いをしており、通塾の回数も週4.3回である(表14)。なお、合格者は4年生から塾通いをしている子が多い。(表34)



7. 合格者の自我像

テレビをがまんした、あるいは友だちと遊ぶのをがまんしたと思っている子は合格者に多い。(表39)

●調査概要

1. 調査主題 中学受験
2. 調査視点 中学受験が一般化しつつある中、受験に対する意識や生活時間、学習状況や塾通いの様子などを分析し、受験する

子としない子の生活や考え方を探ろうとする。

3. 調査項目 6年生の時の自分・学習態度・生活態度・成績などについて、学習塾・家庭教師との関係、受験の有無・合否、など。

まとめ

大都市にサンプルをしぼった本サンプルの私立中学受験率は41%に及んだ。となると、中学受験は少数の例外的な子どもの現象といえなくなる。

受験する子どもたちは、意欲的に勉強しており、生活態度もしっかりとしている。しかし、ほとんど全員が週に4回以上学習塾へ通い、見たいテレビをがまんし、友だちと遊ぶ時間もとれず、毎日4時間近くも勉強している。

小学生のうちからそんなに禁欲的な生活を送る必要があるのか、子どもの成長に心身ともに歪みが生ずるのが心配でならない。子どものうちは、もう少しのんびりと時を過ごさせたいというのは、決して現実を知らない者のたわごとではなく、子どもの成長をまじめに考えれば考えるほど、中学受験のもたらすひずみが気になりとなる。



4. 調査時期 1991年2月～3月
5. 調査対象 都心および東横線、井の頭線沿線の小学校に通う小学6年生。
6. 調査方法 学校通しによる質問紙調査

7. サンプル数 (人)

| 学年/性 | 男子 | 女子 | 計 |
|------|-----|-----|-------|
| 6年 | 800 | 717 | 1,517 |



はじめに

このところ、新聞・テレビ・雑誌等で中学受験に関する特集を目にすることが多い。

例えば、私立中学の難易度ランキング表の分析や大手進学塾のバスを連ねた夏休み合宿の様子。または、ある中学受験生の数か月に及ぶ合格までのドキュメンタリーといった様々な企画である。こうした特集は一昔前までは、ある特定の子を対象としたまれなケースとして取り扱われてきたが、最近状況は一変し、中学受験が一般化の傾向にあるという内容に変わってきた。

事実、夜遅くまで、受験のために塾通いする小学生の集団を駅で見かけることは珍しくないし、首都圏では6年生の3割以上が中学受験に臨むと聞く。しかも、こうした傾向は首都圏から地方へ波及しており、今後、一層過熱化されていく方向にあるという。

こうした背景には、環境悪化説による「公

立中離れ」の現実に加え、能力別クラス制、中高一貫教育といった特色ある私立中学の教育を望む、親のニーズが大きく影響している。

しかし、受験のために小学校生活のおよそ2年間を、十分な遊びやスポーツの時間もとらず、1日4～5時間に及ぶ塾通いに専念するといった生活は、小学生として決して望ましい姿ではあるまい。加えて、こうした受験生が増加するのに伴い、同じクラスで机を並べる受験しない子たちにも、少なからず影響を与えていよう。そこで本調査では、受験に対する意識や生活時間、学習状況や塾通いの様子などを様々な角度から分析し、受験する子と受験しない子の生活や考え方を明らかにしていくことにしたい。では、さっそくそのデータを紹介していくことにしよう。

1. 受験生のプロフィール



■ 受験生の割合 III

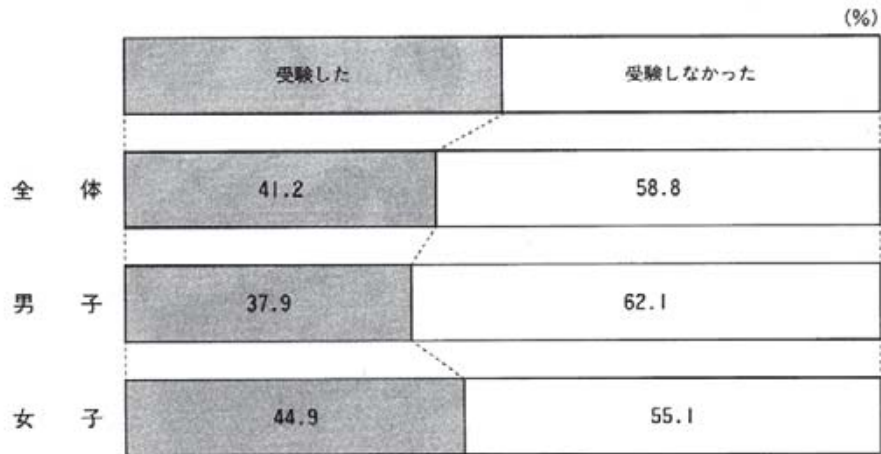
今回、調査の対象となったのは、東京、大阪などの大都市に住む公立小学校の6年生1,517名で、男子は800名(53%)、女子は717名(47%)である。テーマ上、比較的受験生が多そうな交通の便のよいエリアの小学校を選んで調査を実施した。そのため図1が示すように、受験した子は、全体の41%にもなった。しかし、地域や学校によっては、半分以上の子が中学受験するところも少なくないので、中学受験がまれなものから、一般的なものへと変わりつつあることを証明していると言えよう。

男女別の受験率をみると、男子の38%に対して女子は45%と7%も多く、女子の受験志

向が目についた。一説によれば、セーラー服に代表される、オシャレな制服を着たいという女子の願望が受験率を高めているというが、そうだとすると、思春期の女の子らしいストレートな反応で、ほほえましい気持ちになる。

次に、図2は全体の4割以上にのぼる受験生が6年進級当初、すでに受験意志があったかをたずねたものである。「ぜったい十かなり」受験するつもりだった者は76%で、残りの24%は受験に対して消極的であったことがわかる。また、受験しなかった子の約8%は、6年当初受験するつもりであったが、何らかの理由で断念したようだ。

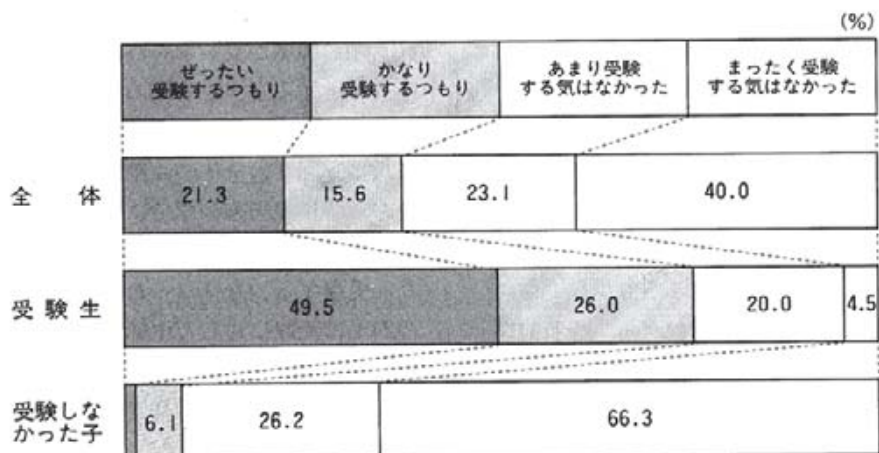
図1 受験をしたか



調査対象 (サンプル)

| 男子 | 女子 | 合計 |
|-----------------|-----------------|--------|
| 800名 (52.7%) | 717名 (47.3%) | 1,517名 |

図2 6年生のはじめのころの受験する意志



1.4

■ 受験生の自己像と考え方 IIII

では、受験生と受験しなかった子を比較した場合、どんなところに差異が見いだされるのであろうか。以下、両者を比較する形で話を進めていくことにしよう。

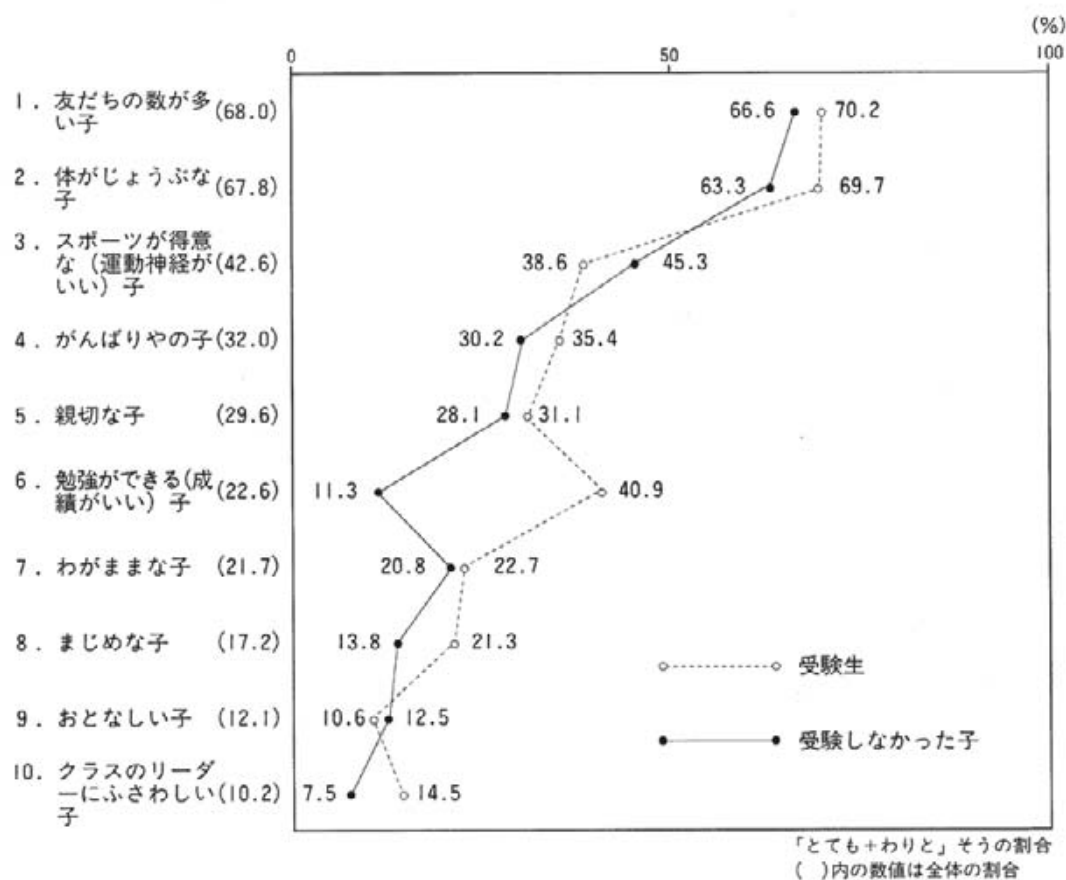
まず図3は自己像を比べたものである。大きく差が出たのは「成績のよさ」で、「とても+わりと」成績のいい子と答えたのは、受験しない子が11%であるのに対し、受験生は41%にも及ぶ。「受験」イコール「学力・成績」であるから、当然の結果と言える。つまり、受

験生を特色づける第1条件が「成績のいい子」ということになる。

また、受験生は成績の他にも「がんばりやの子」「親切な子」「まじめな子」「リーダーにふさわしい子」「体がじょうぶな子」「友だちの多い子」などポジティブな項目での割合が受験しない子を上回っており、スポーツはあまり得意でないが、成績を含めて、総合的に自己像が高いことがわかる。

では、両者は受験に対してどう考えている

図3 自分はどんな子どもか



のであろう。表1によれば、受験生は「将来のために遊ぶのをがまんして勉強することも必要」(36%)、「私立中学や国立中学へ入れれば、将来よい仕事につける」(25%)と思っている割合が高く、受験に対してあまりネガティブなイメージをいだいていないことがわかる。それに対して、受験しない子は、「受験勉強ばかりしていると、友だちがいなくなってしまう」(31%)、「小学生のうち受験勉強などしないほうがよい」(30%)、「受験勉強ばかり

していると体がよくなる」(37%)、「学校の授業をきちんときいていけば、望みの中学に入れる」(24%)といった項目で、受験生を上回る割合を示しており、受験勉強に対して、やや否定的である。男女別では、女子は受験を比較的冷静な目で肯定的にとらえているのに対し、男子は、多少否定的ニュアンスを含みながら、将来のためにかまんしてがんばらねばいけないといった姿勢が読み取れる。

このような受験に対する考え方の違いが、

表1 受験についての考え

(%)

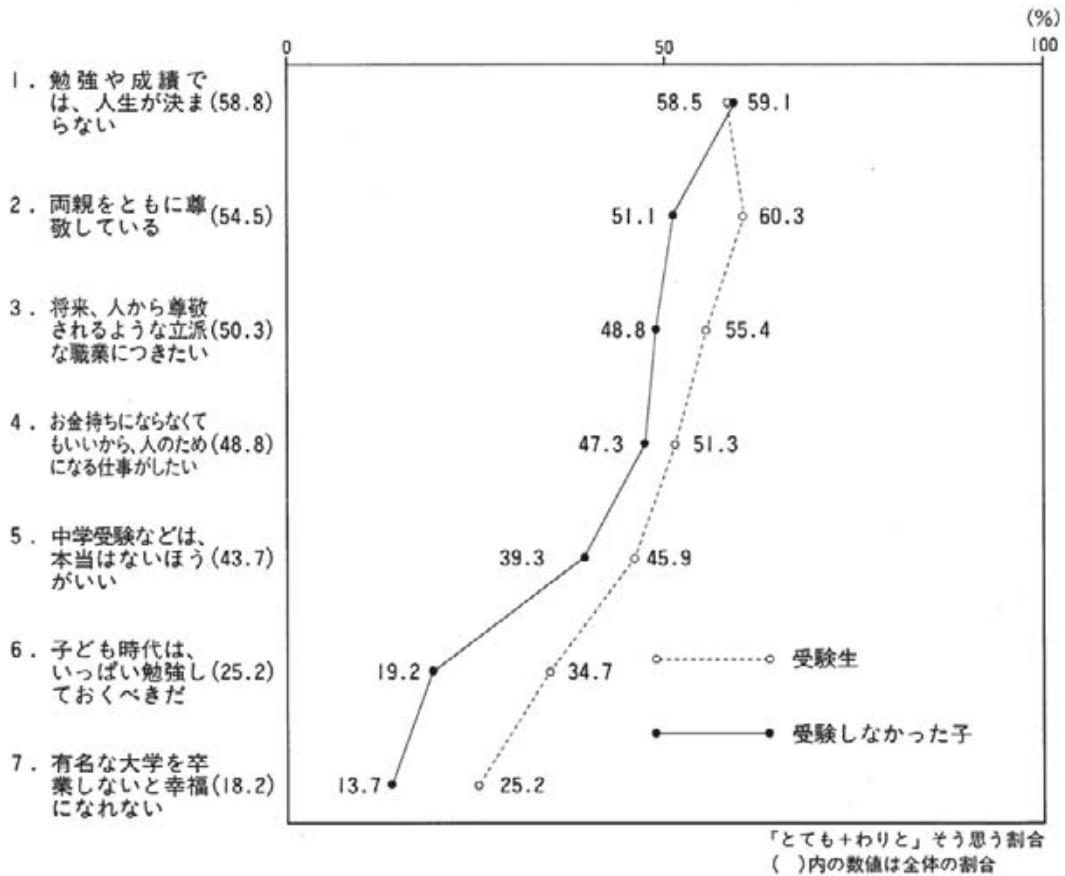
| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 受験生 | 受験しな かった子 |
|---------------------------------|------|------|--------|------|--------------|
| 1. 受験勉強をしている子はがんばりやだと思う | 34.8 | 37.2 | > 31.9 | 29.4 | < 38.7 |
| 2. 受験勉強ばかりしていると体がよくなる | 34.8 | 41.5 | ⋯ 27.4 | 32.0 | 36.8 |
| 3. 受験勉強ばかりしていると、友だちがいなくなってしまう | 25.4 | 30.0 | > 20.3 | 17.5 | ⋯ 31.2 |
| 4. 小学生のうち受験勉強などしないほうがよい | 24.6 | 29.5 | ⋯ 19.0 | 17.1 | ⋯ 29.9 |
| 5. 将来のために遊ぶのをがまんして勉強することも必要だと思う | 22.0 | 25.2 | > 18.3 | 36.2 | ⋯ 12.2 |
| 6. 私立中学や国立中学へ入れれば、将来よい仕事につける | 20.7 | 28.0 | ⋯ 12.5 | 24.5 | > 17.4 |
| 7. 学校の授業をきちんときいていけば、望みの中学に入れる | 18.9 | 19.7 | 18.1 | 12.5 | ⋯ 23.5 |

「とても+かなり」そう思う割合
不等号は5%単位の差を表す

図4に示すような、現在から将来に対してのビジョンにも少なからず影響を及ぼしているようである。例えば、受験生は、「中学受験などは、本当はないほうがよい」(46%)や、「子ども時代は、いっぱい勉強しておくべきだ」(35%)と考えており、「勉強や成績では、人生が決まらない」(59%)と答えてはいるものの、「有名な大学を卒業しないと幸福になれない」(25%)と思っている子の割合も高い。た

だ、うれしいことに、受験生たちは「両親とともに尊敬している」(60%)割合が高く、「将来、人から尊敬されるような立派な職業につきたい」(55%)、「人のためになる仕事がしたい」(51%)といった社会性の高さが目についた。もし、受験生のほとんどがこうした考えをもっていれば、駅や電車内でのマナーの悪い塾通いの子の姿は目にしなくなるはずであるが……。

図4 現在の気持ち



■ 受験生の未来像 Ⅲ

これまでのことを総合すると、受験生は成績がよく自己像も高く、受験や将来に対してもポジティブなイメージをもっていた。そこで、本章のプロフィールをまとめる意味で、将来の進路や職業観をさらに細かく探ってみることにしよう。

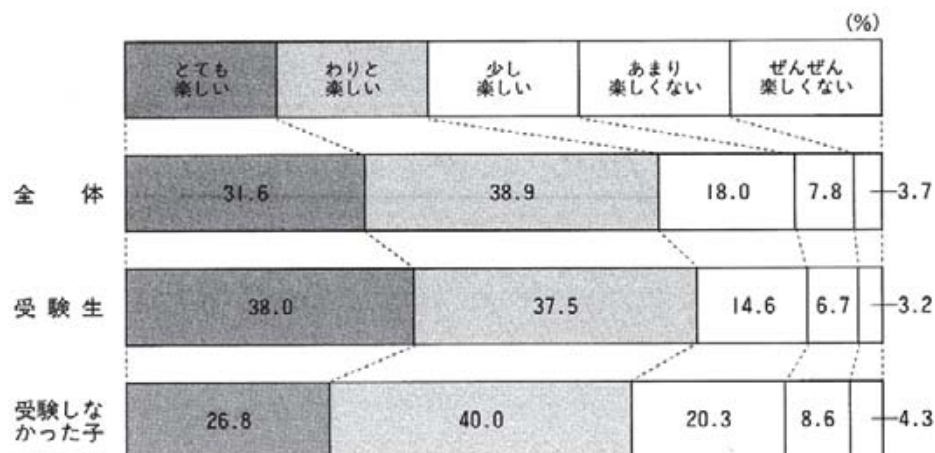
図5は、現在の小学校へ行く楽しさをたずねたものである。調査時期が6年生の3学期、2月～3月で、受験生の進路がすでにはっきりしていたため、受験生は受験勉強もなくなり、76%が「とても+わりと」楽しいと答えている。しかし、受験しない子は67%が楽しいと答えたにすぎない。

さらに、図6が示すように、受験生の64%が中学へ行くのが「とても+わりと」楽しみと答えており、受験しない子の45%を大きく上回っている。また、「あまり+ぜんぜん」楽しみでないと「行きたくない」を合わせた割合も、受験生が16%であるのに対して、受験しない子は29%と、受験生の2倍近い数値を

示している。学校へ行くのが楽しいかどうかは、学業成績に大きく左右されることは常識であるが、受験するしないで、これほどの差が出たことに少々驚かされた。

こうした背景が、中学・高校を経て、大学進学までの自身の青写真に影響を及ぼしていることが表2より明らかで、受験生の84%は、4年制大学進学を希望しており、そのうちの45%近くが、むずかしい一流の大学へ入りたいと考えている。一方、受験しない子はわずか13%しか、むずかしい大学へ入りたいと答えておらず、逆に、「中学・高校まででつとめる」が16%、「短大か専門学校へ行く」が24%と、受験生の割合を大きく上回っている。さらに、男女の比較をしてみると、男子は「中学・高校まででつとめる」(16%)、「むずかしい大学へ入りたい」(30%)割合が女子よりも多く、女子は「短大か専門学校へ行く」が31%で男子の8%に比べて圧倒的に高いことがわかる。こうした男女の差は、おとなの社会

図5 学校へ行く楽しさ



の構造がそのまま反映されていると考えられるが、12歳の子どもにはまだ早すぎる選択であろう。

次に、高校・大学を出てからの職業希望を見てみよう。表3によれば、男子はサラリーマン、会社の社長、パイロット、大学教授、裁判官、コンピュータの技師などの割合が高く、女子は小学校の先生、芸術家、テレビタレントの割合が高かった。全体的には、数値が少々低く、社長や医者になりたいと思う子

がもう少しいてもいいと思った。

さらに、受験生と受験しない子を比べてみると、受験しない子はテレビタレントやサラリーマン、パイロットなどの志望が強く、受験生は大学教授、医者、小学校の先生、裁判官といった大学卒の学歴が必要な職業を志望している。こうした結果は、ある意味で小学6年生の時点で、将来の展望にはっきり差が認められ、そこには男女差に加えて、学力や成績というスケールが大きく関与しているこ

図6 中学へ行く楽しさ

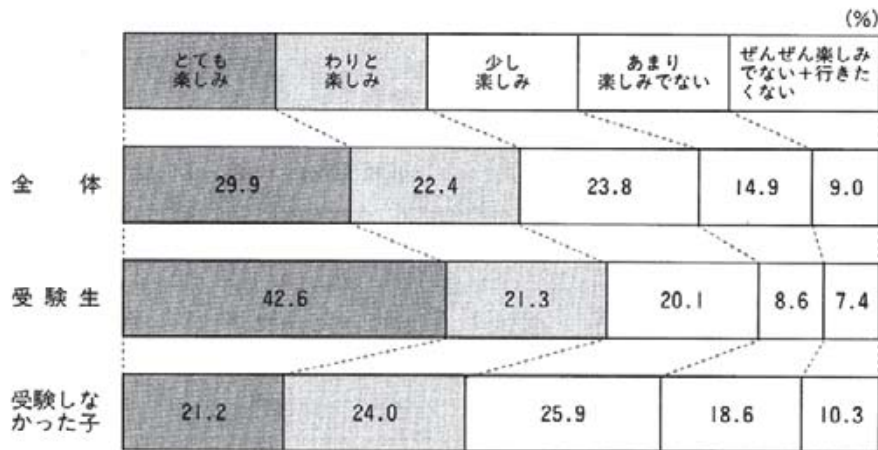


表2 将来の進路

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 受 験 生 | 受 験 し な かった 子 |
|-----------------|------|---------|------|----------|---------------|
| 1. 中学・高校まででつとめる | 11.9 | 16.1 > | 7.2 | 3.4 < | 16.2 |
| 2. 短大か専門学校へ行く | 19.0 | 8.4 <<< | 30.8 | 12.9 < | 23.8 |
| 3. ふつうの大学へ入りたい | 43.8 | 45.6 | 41.9 | 39.3 < | 47.1 |
| 4. むずかしい大学へ入りたい | 25.3 | 29.9 > | 20.1 | 44.4 >>> | 12.9 |

不等号は5%単位の差を表す
○印は最大値

とが示されている。言いかえれば、子どもたち一人一人が自己の能力を正しく認識している証拠かもしれない。しかし、前にも述べた通り、これから先の将来のことはどうなるか

わからないし、成績で人生が決まるわけではないから、一時の成績という結果に振りまわされず、12歳の少年少女らしく、もっと万能感をもって成長を遂げてほしい気がした。

表3 将来つきたい職業

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 受験生 | 受験しな かった子 |
|--------------|------|------|------|------|--------------|
| 1. 大きな会社の社長 | 25.3 | 35.7 | 11.1 | 24.1 | 27.1 |
| 2. 医 者 | 25.3 | 24.3 | 26.7 | 30.1 | 21.3 |
| 3. 小学校の先生 | 22.3 | 12.5 | 35.7 | 26.0 | 20.4 |
| 4. サラリーマン | 22.2 | 32.0 | 7.5 | 19.3 | 25.0 |
| 5. コンピュータの技師 | 21.4 | 28.6 | 11.6 | 20.5 | 21.7 |
| 6. テレビタレント | 19.8 | 17.8 | 22.8 | 13.1 | 24.8 |
| 7. 芸術家 | 18.0 | 14.6 | 22.7 | 16.7 | 19.2 |
| 8. パイロット | 13.1 | 19.0 | 5.1 | 9.8 | 16.2 |
| 9. 裁判官 | 12.8 | 21.5 | 9.4 | 18.4 | 8.5 |
| 10. 大学教授 | 11.6 | 13.7 | 8.7 | 18.1 | 6.7 |

不等号は5%単位の差を表す

2. 受験生の生活



■ 受験生の学校生活 III

前章では受験生のプロフィールを大まかな形で紹介してきたので、この章では受験生の生活時間(特に2学期のころを中心に)を様々な角度から探っていくことにしたい。

図7は学校での授業態度をたずねたものである。「いつもきちんとノートをとる」(58%)、「テストで100点をとろうとがんばる」(57%)、「宿題をまじめにやる」(54%)、「自分から進んで手をあげる」(41%)、「先生の話をもじめにきく」(39%)などをはじめ、どの項目でも受験生は、受験しない子よりも積極的で、しかもまじめに学習に取り組んでいることがわかる。つまり、受験という目標をもっていることで、授業や学習に取り組む姿勢が一段とよくなっているのであろう。しかも、それは学習面に限らず図8が示すように、生活面においてもよい結果となってあらわれている。

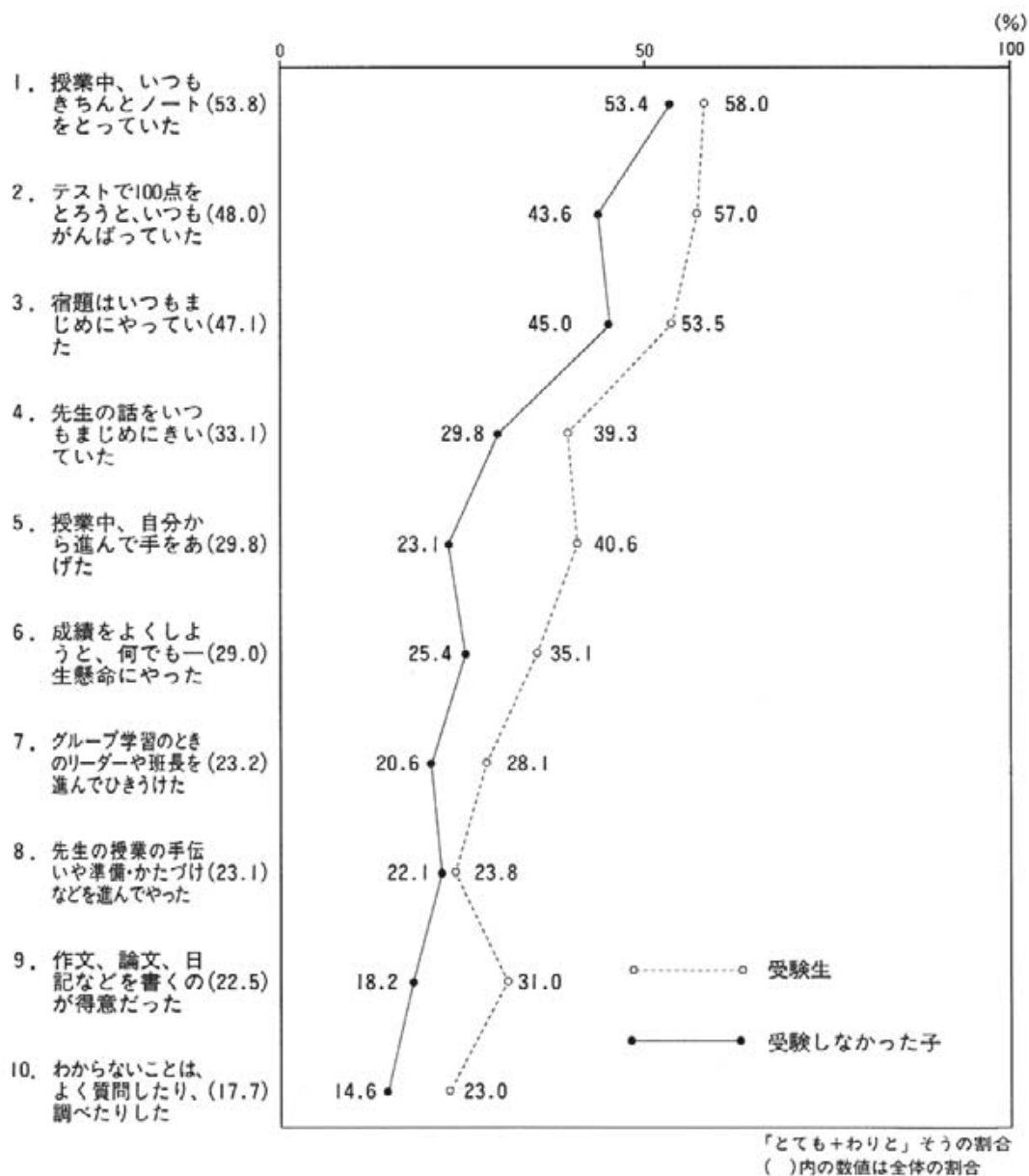
例えば、給食を残さず食べることから、交友関係、男女の仲、係や当番、委員会の仕事、クラス代表の仕事まで、すべての項目で受験生のほうがまじめで積極的に生活していることがわかる。ともすると、受験生は勉強だけしっかりしている子といったような先入観で見られがちだが、実際はそうでもなく、学校生活の様々な場面で学習同様、一生懸命がんばっているようであった。

しかし、ひとたび学校を離れた生活に戻ると、図9が示すように受験生特有の問題をかかえていることがわかる。受験しない子とのパーセンテージの差が多い順にあげると、「毎日、勉強におわれて苦しかった」(+21%)、「放課後や休日は、友だちとよく外で遊んだ」(-17%)、「いろいろな意味でストレスがたまっていた」(+14%)、「体の調子が悪いの

に、無理をして勉強をしていたことがあった」(+13%)、「睡眠時間が不足していて、いつも眠かった」(+10%)というように、目に見えぬストレスや過剰勉強、睡眠不足に悩まされていた子も少なくない。しかも、受験生の3～4割がそうした状態にあることがわかる。やはり、中学受験の一番の問題は5～6年生

の成長期に活動的な遊びやスポーツを切り捨て、受験勉強に振り替えていく上で起こる子どもたちの体や心理面でのアンバランスが長期にわたって継続されることであろう。そうした状態から生まれるストレスやプレッシャー、体の変調などをうまく処理していければいいのだが、実際は受験勉強に耐えていける

図7 6年生の学習態度



子とそうでない子がいるので、そうしたことを十分承知した上で、受験に臨む必要があるであろう。というのも、中学受験のもつメリットだけが先行し、そのリスクに対しての認識が甘いため、子どもの可能性を早期につぶしてしまうケースも少なくないからだ。今後、首都圏を中心に一層中学受験ブームは過熱化

されるであろうから、私立中学の偏差値を調べる以上に、子どもたちのこうした心や体のストレスに親や教師の正しい判断が要求されよう。

図8 6年生の生活態度

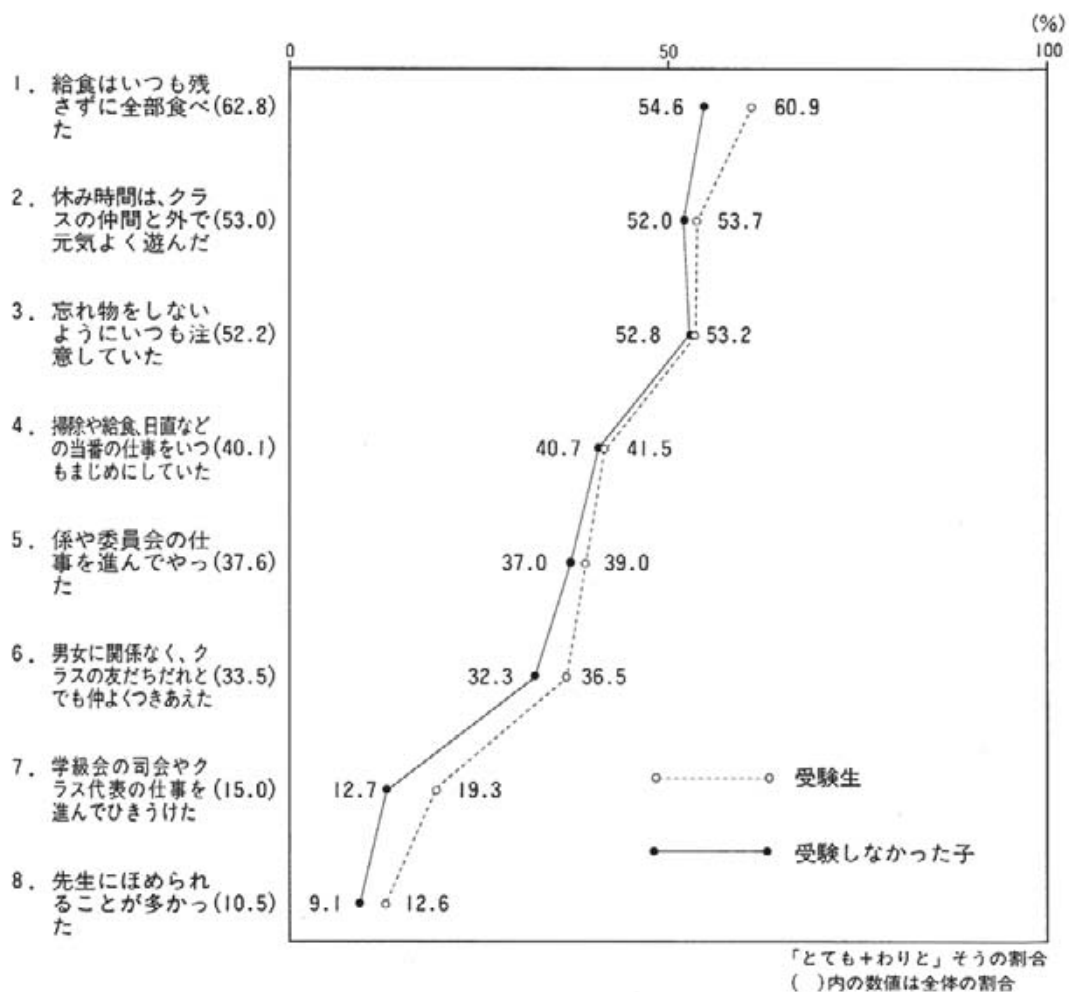
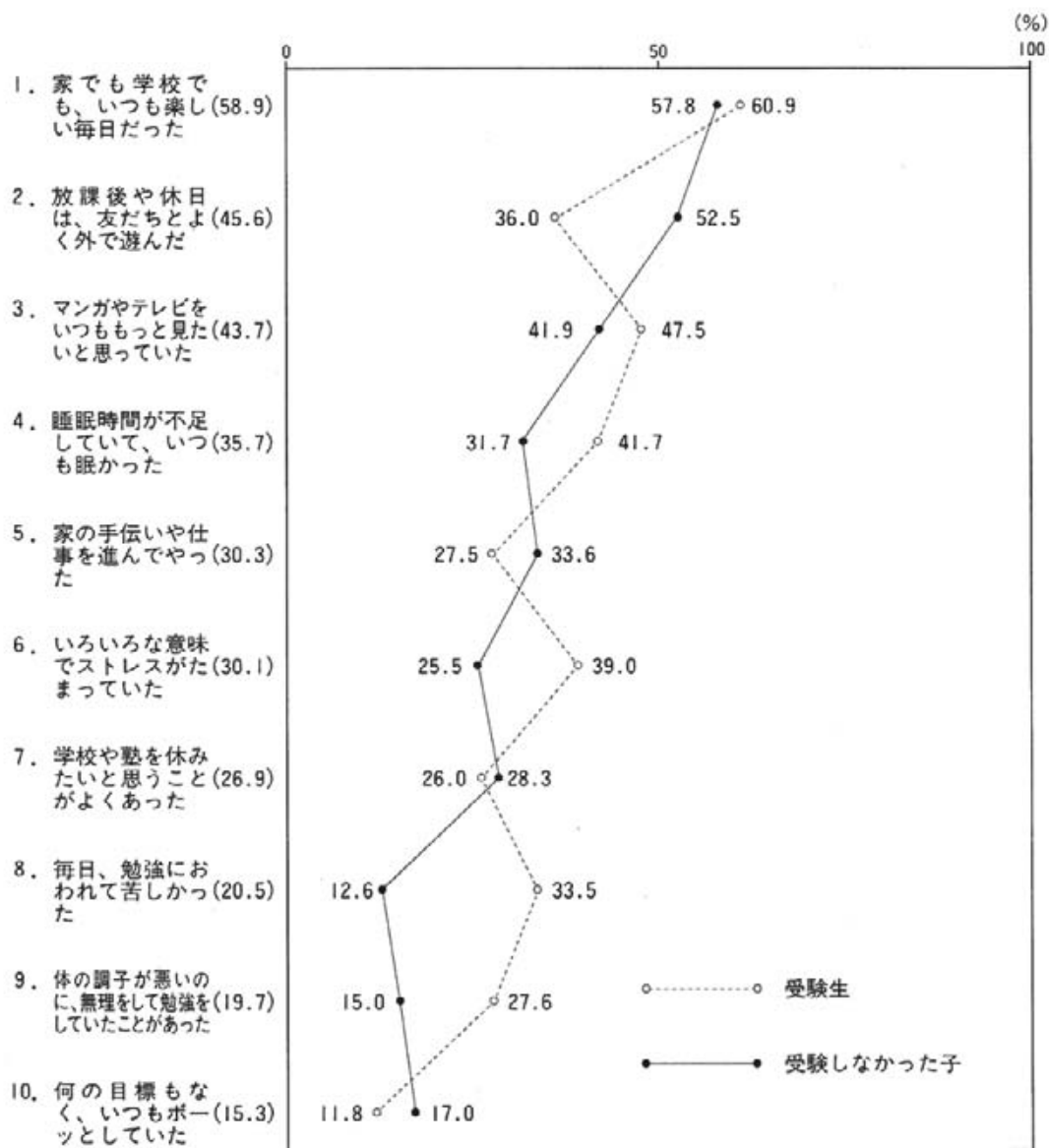


図9 家庭生活の様子



「とても+わりと」そうの割合
()内の数値は全体の割合

■ 受験生の睡眠時間 Ⅲ

受験生といっても、学力のレベルや受験しようとしている中学校のレベル、家庭の教育方針などによって様々な子が存在しよう。しかし、一般的な受験生と受験しない子を比較した場合、明らかに異なるのは塾通いに代表される放課後の生活の様子であろう。そこで、これからは受験生の最も受験生らしい部分である放課後の生活時間を細かく追っていくことにしたい。

まず表4の①～③は就寝・起床の時刻、睡眠時間を示している。①の就寝時刻をみると、受験しない子は10時半前後をピークに12時前にはほぼ9割の子が就寝しており、平均就寝時刻は10時42分であった。これに対して受験生は、約1時間後の11時半前後をピークに就寝し、12時前後もしくは12時以降も起きている子が34%で全体の3分の1にもものぼる。しかも、10時前に寝る子は4%にすぎず、早寝早起きを美德と教育されたわれわれの小学校時代とは隔世の感がある。平均就寝時刻は受験しない子より36分遅い11時18分で、おとなと全く変わらない結果であった。受験勉強のためとはいえ、11時～12時以降まで起きているのは、12歳の子どもの生活として決して望ましいことではあるまい。加えて受験しない子も11時近くまで起きている。見たいテレビ

やマンガもあろうが、小学生のうちには必ず10時までには床につかせるといった躰を親側に望みたい気がした。

②の起床時刻をみると、両者に大差はなく7時～7時半ごろに7割ほどが起きており、平均起床時刻も7時5～6分であった。ただ、受験生側に8時ごろ～8時以降に起きる子の割合が12%もあり（受験しない子の6%の2倍）、昨夜の受験勉強が原因と考えられる。この子どもたちは、朝食や排便をきちんと済ませ、遅刻しないで登校できるのだろうか。とても気にかかる。

こうした結果は、③の睡眠時間にはっきり表れており、受験しない子の8時間5分に対し受験生は7時間35分で30分も睡眠時間が短い。こうした状態が半年から1年以上も続くのであるから、睡眠不足の子や朝起きられない子が多く出現するのも当然であろう。まして受験生の中には、睡眠時間が7時間に達しない子が21%もあり、体力がもつのか心配になる。睡眠が時間の長さではなく、眠りの質によることは承知であるが、成長期の小学6年生であれば、少なくとも8～9時間の睡眠時間を確保したいものである。また、それが親のつとめでもあるだろう。

表4

① 就寝時刻

(%)

| | 9時前 | 9時ごろ | 9時半ごろ | 10時ごろ | 10時半ごろ | 11時ごろ | 11時半ごろ | 12時ごろ | 12時以降 | 平均 |
|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|--------|
| 受験生 | 1.2 ^ | 0.9 ^ | 2.1 ^ | 7.1 ^ | 13.2 ^ | 19.2 ^ | 22.8 v | 16.2 v | 17.3 v | 11時18分 |
| 受験しなかった子 | 1.4 | 4.1 | 6.2 | 16.2 | 22.4 | 22.1 | 16.3 | 6.0 | 5.3 | 10時42分 |
| 全体 | 1.3 | 2.9 | 4.8 | 12.5 | 18.5 | 20.7 | 19.3 | 9.9 | 10.1 | 10時57分 |

○ 印は20%以上、○ 印は15%以上のもの

② 起床時刻

(%)

| | 5時前 | 5時ごろ | 5時半ごろ | 6時ごろ | 6時半ごろ | 7時ごろ | 7時半ごろ | 8時ごろ | 8時以降 | 平均 |
|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|-------|
| 受験生 | 0.7 v | 0.3 ^ | 2.1 v | 7.1 v | 11.8 ^ | 35.5 ^ | 30.3 ^ | 9.2 v | 3.0 v | 7時05分 |
| 受験しなかった子 | 0.2 | 0.4 | 0.7 | 4.4 | 12.7 | 36.2 | 39.1 | 5.7 | 0.6 | 7時07分 |
| 全体 | 0.4 | 0.4 | 1.3 | 5.5 | 12.3 | 35.8 | 35.5 | 7.1 | 1.7 | 7時06分 |

○ 印は最大値

③ 睡眠時間

(%)

| | 6時間以内 | 約6時間 | 約6時間半 | 約7時間 | 約7時間半 | 約8時間 | 約8時間半 | 約9時間 | 約9時間半 | 10時間以上 | 平均 |
|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|--------|
| 受験生 | 4.8 v | 8.2 v | 8.2 v | 18.2 v | 17.0 v | 18.9 ^ | 10.7 ^ | 7.5 ^ | 3.9 ^ | 2.6 ^ | 7時間35分 |
| 受験しなかった子 | 2.5 | 1.8 | 5.3 | 13.7 | 10.7 | 23.4 | 15.6 | 15.9 | 7.1 | 4.0 | 8時間05分 |
| 全体 | 3.4 | 4.4 | 6.7 | 15.4 | 13.1 | 21.3 | 13.4 | 12.4 | 6.2 | 3.7 | 7時間53分 |

○ 印は15%以上のもの

■ テレビやマンガとのかかわり IIII

次に、テレビの視聴時間を見てみよう。表5によれば、受験生の平均は1時間47分で、受験しない子の2時間47分より、ちょうど1時間少ない計算になる。受験しない子の中には1日4時間以上テレビを見る子が19%、3時間以上では54%にもものぼる。受験勉強がないからとはいえ、少々テレビを見る時間が多そうだ。小学6年生のテレビ視聴という面から考えれば、受験生のほうが好ましい見方をしていると考えられる。

では、マンガはどうであろう。表6・表7によると、受験生の約3割はマンガをほとんど読まず、週平均で2.7回、1日平均では24分という計算になる。受験しない子と比較すると、確かに低い数値ではあるが、受験勉強の合い間や塾へ行く途中などの5～10分という「すき間」の時間に、うまく入り込める気ばらし型の遊びとして、受験生にも人気が高く、そのため、受験しない子との差もわずかなものとなったのだろう。

表5 1日のテレビの視聴時間

(%)

| | 全く見ない | 30分以内 | 約30分 | 約1時間 | 約1時間半 | 約2時間 | 約2時間半 | 約3時間 | 約3時間半 | 約4時間 | 4時間以上 | 平均 |
|----------|-------|-------|------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|--------|
| 受験生 | 5.1 | 8.2 | 5.8 | 21.2 | 15.4 | 15.8 | 7.4 | 7.2 | 3.2 | 3.9 | 6.8 | 1時間47分 |
| 受験しなかった子 | 0.2 | 0.7 | 1.8 | 10.6 | 10.5 | 13.2 | 9.5 | 18.0 | 8.3 | 8.0 | 19.2 | 2時間47分 |
| 全体 | 2.1 | 4.0 | 3.5 | 14.3 | 12.2 | 14.3 | 8.4 | 14.2 | 6.2 | 6.2 | 14.6 | 2時間24分 |

○印は10%以上のもの、○印は最大値

表6 帰宅後、マンガを読む回数（週に何回）

(%)

| | ほとんど読まない | 週に1～2回 | 週に3～4回 | 週に5～6回 | たいてい毎日 | 平均 |
|----------|----------|--------|--------|--------|--------|------|
| 受験生 | 28.9 | 28.5 | 17.8 | 6.2 | 18.6 | 2.7回 |
| 受験しなかった子 | 14.8 | 26.2 | 25.1 | 10.7 | 23.2 | 3.5回 |
| 全体 | 20.4 | 27.3 | 22.0 | 8.6 | 21.7 | 3.2回 |

○印は最大値

表7 帰宅後、マンガを読む時間（1日の平均）

| | ほとんど 読まない | 約10分 | 約20分 | 約30分 | 約40分 | 約50分 | 約1時間 | 1時間 以上 | 平均 |
|--------------|--------------|------|------|------|------|------|------|-----------|-----|
| 受験生 | 29.2 | 13.5 | 16.5 | 21.1 | 5.3 | 0.5 | 5.0 | 8.9 | 24分 |
| 受験しな かった子 | 14.5 | 11.1 | 16.6 | 24.5 | 9.5 | 3.7 | 9.3 | 10.8 | 33分 |
| 全 体 | 20.3 | 12.1 | 16.6 | 22.9 | 7.8 | 2.5 | 7.8 | 10.0 | 29分 |

○印は最大値

■ 受験生の遊びと勉強 III

テレビやマンガの時間とともに両者の生活時間が大きく異なるのが、遊びと勉強の時間である。表8は帰宅後、週に何回友だちと遊ぶかをたずねたものだが、受験生の43%が「ほとんど遊ばない」、34%が「週に1～2回遊ぶ」と答えており、遊びの平均回数は1.5回であった。これは受験しない子の3.4回に比べ、およそ2回も少ない。さらに、友だちと遊ぶ、遊ばないに関係なく、放課後どのくらい遊んでいるかを見てみると(表9)、1人でも「ほとんど遊ばない」受験生は18%、「約30分」も含めて、30分以下しか遊ばない受験生は、受験生全体の4割近くにもなる。しかも、「約1時間」は17%、「約1時間半」は10%、「約2時間」は11%と、平均しても1日1時間20分しか遊んでいない。受験しない子の1日平均2時間12分に比べて52分少ない計算となる。

確かに、受験生の遊び時間は少なく、多くの問題をかかえていようが、受験しない子どもたちも意外に遊び時間が少ないのに驚かされる。健康な子どもたちが、1日2時間程度遊べば十分なのであろうか心配である。

では、遊び時間が減少してきた分、勉強時間が増加しているのであろうか、確かめてみよ

う。表10は、帰宅後の勉強時間を示したもので、塾や家庭教師との勉強時間も含めている。受験生と受験しない子とで、これだけ差がはっきり表れたのはこの項目だけで、受験生のモーレツな勉強ぶりには頭が下がる思いである。

詳しく見ていくと、受験しない子は、約1時間が23%で一番多く、平均でも1時間18分が1日の勉強時間である。これに対し受験生は1日5時間以上勉強するモーレツな子が一番多く、全体の4分の1を上回る26%もいる。平均時間は受験しない子の1時間18分を2時間半も上回る3時間48分で、1日4時間近く勉強する計算になる。はたして、1日こんなに勉強していいものかわからないが、遊びと勉強の時間のバランスをもう少し考える必要が大いにある。というのも、受験しない子は、「遊び」対「勉強」の時間の比率はほぼ2対1であるが、受験生は1対3と勉強時間が遊びの3倍にも及んでいるからである。受験のためだから仕方ないといえばそれまでだが、本当に何とかならぬものだろうか。

このような勉強に対する偏った見方や考え方が受験生の生活全体を大きく変化させてき

たのであろう。例えば、表11の勉強部屋の有無では受験生は51%が自分専用の部屋を与えてもらい、勉強に専念できる体制を整えてもらっているし、表12が示すように、受験生の94%は学習塾に通い、26%は家庭教師をつけるといった状況の中での生活が進行している。そのため、1週間のうち平均4.5日も予定が入った生活が成立してしまう(表13)。こうなれば、放課後友だちとのん気に外で遊ぶ時間を

見つけるのが困難であろう。

こうした理由から、受験生の生活が受験しない子と大きく異って行くのは当然のなりゆきであるが、決して子どもたちには望ましいことではあるまい。しかも同じクラスの中に、性別にも匹敵するかのような「受験」という新たな分類スケールが出現しつつあるのも確かだ、こうした傾向をどう好ましいものにするかが今後の課題であろう。

表8 帰宅後の友だちとの遊び(週に何回、友だちと遊ぶか)

(%)

| | ほとんど遊ばない | 週に1~2回 | 週に3~4回 | 週に5~6回 | たいてい毎日 | 平均 |
|----------|----------|--------|--------|--------|--------|------|
| 受験生 | 43.3 | 34.0 | 15.3 | 3.2 | 4.2 | 1.5回 |
| 受験しなかった子 | 7.5 | 30.4 | 33.2 | 13.8 | 15.1 | 3.4回 |
| 全体 | 22.0 | 31.7 | 25.9 | 9.6 | 10.8 | 2.7回 |

○印は最大値

表9 帰宅後の遊び時間(1日の平均)

(%)

| | ほとんど遊ばない | 30分以内 | 約30分 | 約1時間 | 約1時間半 | 約2時間 | 約2時間半 | 約3時間 | 約3時間半 | 4時間以上 | 平均 |
|----------|----------|-------|------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|--------|
| 受験生 | 18.4 | 9.3 | 11.2 | 17.2 | 10.4 | 10.8 | 6.7 | 6.9 | 3.4 | 5.7 | 1時間20分 |
| 受験しなかった子 | 8.4 | 3.6 | 6.4 | 12.1 | 8.9 | 12.0 | 11.6 | 14.2 | 5.9 | 16.9 | 2時間12分 |
| 全体 | 12.8 | 5.8 | 8.1 | 14.2 | 9.4 | 11.4 | 9.2 | 11.0 | 5.2 | 12.9 | 1時間54分 |

○印は最大値

表10 帰宅後の勉強時間

(%)

| | 30分以内 | 約30分 | 約1時間 | 約1時間半 | 約2時間 | 約2時間半 | 約3時間 | 約3時間半 | 約4時間 | 約4時間半 | 5時間以上 | 平均 |
|----------|-------|------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|--------|
| 受験生 | 1.8 | 1.1 | 5.1 | 4.0 | 7.9 | 7.9 | 9.8 | 11.4 | 14.2 | 11.2 | 25.6 | 3時間48分 |
| 受験しなかった子 | 13.3 | 14.3 | 22.5 | 16.1 | 14.4 | 7.9 | 5.3 | 2.9 | 2.1 | 0.2 | 1.0 | 1時間18分 |
| 全体 | 9.3 | 9.2 | 15.5 | 11.4 | 11.6 | 8.0 | 7.0 | 5.9 | 6.6 | 4.5 | 11.0 | 2時間32分 |

○ 印は10%以上のもの、◯ 印は最大値

表11 勉強部屋の有無

(%)

| | 全体 | 男子 | 女子 | 受験生 | 受験しなかった子 |
|-----------------|------|------|------|------|----------|
| 自分専用の部屋がある | 38.2 | 38.1 | 38.3 | 51.1 | 29.1 |
| きょうだいと一緒にの部屋がある | 39.0 | 37.8 | 40.4 | 34.5 | 42.4 |
| 特別にはない | 22.8 | 24.1 | 21.3 | 14.4 | 28.5 |

不等号は5%単位の差を表す

表12 塾や家庭教師で勉強をした割合

(%)

| | 学習塾だけ | 学習塾と家庭教師の両方 | 家庭教師だけ | 両方ともしていない |
|----------|-------|-------------|--------|-----------|
| 受験生 | 70.8 | 23.4 | 2.3 | 3.5 |
| | 94.2 | | | |
| 受験しなかった子 | 49.7 | 2.2 | 3.0 | 45.1 |
| | 51.9 | | | |
| 全体 | 55.9 | 10.5 | 3.1 | 30.5 |
| | 66.4 | | | |

表13 1週間に予定の入っている日数

(%)

| | ない | 1日 | 2日 | 3日 | 4日 | 5日 | 6日 | 7日 | 平均 |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|-----|------|
| 受験生 | 3.5 | 2.5 | 5.6 | 12.0 | 24.3 | 23.4 | 19.2 | 9.5 | 4.5日 |
| 受験しなかった子 | 11.1 | 13.0 | 16.1 | 21.3 | 20.2 | 10.0 | 6.4 | 1.9 | 2.9日 |
| 全体 | 8.9 | 9.3 | 11.9 | 16.9 | 21.4 | 15.2 | 11.4 | 5.0 | 3.5日 |

○印は15%以上のもの、◯印は最大値

■ 学習塾と受験生 III

学習塾や家庭教師は、受験生が志望校へ合格するための必要条件だといわれている。そこで、受験生たちが両者とどうかかわっているかをもう少し詳しく探ってみることにしよう。

表14は、塾に通っている者（全体の66%に当たり、受験生は94%、受験しない子は52%が通っている）のうち、週何回通っているかをたずねたものである。受験生は週4回が一番多く33%、次が週5回の20%で、週6回以上のモーレッツな子も21%おり、平均週4.3回に達した。受験しない子は週2～3回が平均的で、ちょうど週2.5回が平均値であった。

塾で勉強する教科は、国語・算数・理科・社会といった、いわゆる主要4教科が中心である。表15が示すように受験生の98%が算数を、97%が国語を勉強し、49%が理科と社会を勉強している。これは、受験科目が国・算だけの2教科型か、理・社を含めた4教科型かのちがいで生じるようで、2教科型受験の子と4教科型受験の子の比率が、ほぼ1対1であると推測される。受験しない子の場合には算数（85%）、国語（75%）を中心に、実力アップ、学力向上、苦手教科の克服が主眼となる。そのため理科や社会はわずか20%の子が選択しているにすぎない。特徴的なのは、主要4教科以外の教科（その他となっているが、

たぶん英語である）を塾で勉強している子が受験しない子の48%もいることである。受験生は、目の前の受験のために9%の子しか勉強していない。つまり、受験生は来たるべき現実のために、一直線にいわゆる主要4教科の勉強をしているが、受験しない子の半数は、塾ですでに中学校の英語を勉強し始めていることがわかる。

次に、塾へ通う目的をたずねてみた（表16）。受験生は当然、「中学受験のため」（92%）が圧倒的だが、受験しない子は、「もっと実力をつけるため」（46%）、「予習・復習のため」（20%）、「学校の成績アップのため」（20%）など様々である。また、塾に行き始めた学年を見てみると（表17）、受験しない子は5年生からが33%で一番多く、次いで6年生（29%）、4年生（23%）の順であった。これに対し受験生は4年生からが39%と一番多く、3年生からも15%おり、中学年の段階で5割以上の子が塾に行き始める。そして5年生からは32%、6年生になってからはわずか10%と少なくなる。どうやら受験勉強は6年生からでは遅く、3、4年生からスタートさせるケースが増えているようである。

かつての大学受験では、睡眠時間の長さで合否が決まるという「3当4落」という造語

が流行ったが、現在では中学受験に転用され、3年生から受験勉強を始めれば(塾に通えば)合格するが、4年生からではもう遅いとまで言われているので、こうした受験勉強の早期化が一般化してくるのであろう。小学校時代の半分が受験勉強で彩られるとは、子どもの側に立てば、何とも気の毒なことである。

では、もう少し塾での生活を細かく追ってみることにしよう。表18・表19は塾の始まりと終わりの時刻である。始まりの時刻は5時をピークとして、両者とも大差はない。しかし受験しない子は、時間のばらつきが多く、受験生は4時半～5時半前後に9割近くが集

中するという特徴がある。おそらくこの時間帯に塾でのメイン授業がスタートするのであろう。また、終わりの時刻では、受験しない子の9割が8時までに塾の勉強を終わらせているが、受験生で8時までに終わる子はわずか27%で、8時～9時が36%、9時～10時が30%、10時をすぎても塾で勉強している子が7%もいる。つまり、受験生の大半が塾で3～4時間近く勉強している計算になる。

そうした結果は表20が示すように、帰宅時刻が9時～10時(44%)をピークに平均9時10分という、残業をした会社員なみの時刻となる。受験しない子の7時4分という帰宅時

表14 塾について(週何回行っていたか)

| | | (%) | | | | | | | |
|----------|--|------|------|------|------|------|------|-----|------|
| | | 1回 | 2回 | 3回 | 4回 | 5回 | 6回 | 7回 | 平均 |
| 受験生 | | 1.7 | 7.1 | 16.5 | 33.4 | 20.4 | 15.7 | 5.2 | 4.3回 |
| 受験しなかった子 | | 12.5 | 41.3 | 32.6 | 12.3 | 0.8 | 0.5 | 0.0 | 2.5回 |
| 全体 | | 6.2 | 21.9 | 23.2 | 24.4 | 12.2 | 9.0 | 3.1 | 3.5回 |

○印は最大値

表15 塾で勉強していた教科

| | | (%) | | | | |
|----------|--|------|------|------|------|------|
| | | 国語 | 算数 | 社会 | 理科 | その他 |
| 受験生 | | 96.9 | 97.5 | 49.0 | 49.2 | 9.0 |
| 受験しなかった子 | | 74.9 | 85.0 | 19.8 | 19.5 | 48.1 |
| 全体 | | 87.6 | 92.2 | 36.8 | 36.7 | 26.3 |

○印は最大値

刻から遅れること約2時間であった。そして、さらに受験生は、表21が示すように平均1時間17分の勉強を帰宅後にこなすことになる。

これならば、先の章で指摘した11時以降の就寝もやむをえないであろう。それにしても、何とハードな勉強ぶりであろう。これで合格すればいいが、もし最悪の結果ともなれば、どんなにショックか想像に絶えない。

次に塾での成績を見てみよう(表22)。塾では、学校とちがい目的に応じていくつかのコースが設けられており、クラスも能力別になっているものがほとんどである。そのため、学校のように受験生と受験しない子の成績が

極端に偏ることはないが、総じて受験生の成績がよいことがわかる。しかも、能力別クラスは受験生にとってメリットが大きいので、表23が示すように、塾に行ってもよかったという割合が78%（「とてもよかった」48%+「わりとよかった」30%）にものぼり、受験しない子の57%を20%以上も上回った。おとなからみれば、相当ハードな勉強ぶりに映るが、受験という目標をもつての勉強には、合否という結果はともかく、子どもたちは肯定的な判断を下しているのであろう。

表16 塾へ行く目的

(%)

| | 中学受験のため | 学校の成績アップのため | もっと実力をつけるため | 予習・復習のため | みんなが行くから | その他 |
|----------|---------|-------------|-------------|----------|----------|------|
| 受験生 | 91.6 | 2.1 | 5.1 | 0.7 | 0.0 | 0.5 |
| 受験しなかった子 | 2.0 | 19.9 | 46.1 | 20.2 | 1.5 | 10.3 |
| 全体 | 52.0 | 10.2 | 22.9 | 8.8 | 0.7 | 5.4 |

○印は最大値

表17 塾に行き始めた学年

(%)

| | 6年生 | 5年生 | 4年生 | 3年生 | 2年生 | 1年生 | それ以前 |
|----------|------|------|------|------|-----|-----|------|
| 受験生 | 9.9 | 32.3 | 38.5 | 15.0 | 3.0 | 0.4 | 0.9 |
| 受験しなかった子 | 28.6 | 32.5 | 22.8 | 7.1 | 3.5 | 3.5 | 2.0 |
| 全体 | 18.2 | 32.4 | 31.7 | 11.5 | 3.3 | 1.7 | 1.2 |

○印は最大値

表18 塾で勉強を始める時刻

(%)

| | 3時前 | 3時ごろ | 3時半ごろ | 4時ごろ | 4時半ごろ | 5時ごろ | 5時半ごろ | 6時ごろ | 6時半ごろ | 7時すぎて |
|----------|-----|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|-------|
| 受験生 | 1.5 | 0.2 | 1.1 | 4.0 | 18.9 | 42.2 | 26.9 | 2.3 | 1.0 | 1.9 |
| 受験しなかった子 | 3.1 | 1.8 | 2.6 | 12.0 | 25.8 | 29.7 | 11.5 | 7.4 | 3.8 | 2.3 |
| 全体 | 2.1 | 0.9 | 1.7 | 7.4 | 21.3 | 37.0 | 20.5 | 4.4 | 2.3 | 2.4 |

○ 印は20%以上のもの

表19 塾で勉強が終わる時刻

(%)

| | 4時前 | 4～5時 | 5～6時 | 6～7時 | 7～8時 | 8～9時 | 9～10時 | 10～11時 | 11時すぎて |
|----------|-----|------|------|------|------|------|-------|--------|--------|
| 受験生 | 0.2 | 0.2 | 2.1 | 10.2 | 14.0 | 36.3 | 30.4 | 5.5 | 1.1 |
| 受験しなかった子 | 0.5 | 6.3 | 19.4 | 42.9 | 20.2 | 8.6 | 1.8 | 0.3 | 0.0 |
| 全体 | 0.3 | 2.8 | 9.4 | 24.3 | 16.9 | 24.4 | 17.9 | 3.3 | 0.7 |

○ 印は20%以上のもの

表20 塾が終わって帰宅する時刻

(%)

| | 4時前 | 4～5時 | 5～6時 | 6～7時 | 7～8時 | 8～9時 | 9～10時 | 10～11時 | 11～12時 | 12時すぎて | 平均 |
|----------|-----|------|------|------|------|------|-------|--------|--------|--------|-------|
| 受験生 | 0.2 | 0.0 | 0.4 | 5.3 | 14.6 | 12.9 | 44.0 | 19.5 | 2.5 | 0.6 | 9時10分 |
| 受験しなかった子 | 0.3 | 2.5 | 12.7 | 39.3 | 28.7 | 10.4 | 5.3 | 0.8 | 0.0 | 0.0 | 7時04分 |
| 全体 | 0.2 | 1.2 | 5.5 | 19.9 | 20.7 | 11.8 | 27.3 | 11.4 | 1.6 | 0.4 | 8時14分 |

○ 印は最大値

表21 塾から帰って寝るまでにする勉強時間

(%)

| | ぜんぜん していない | 30分 以内 | 約30分 | 約1 時間 | 約1 時間半 | 約2 時間 | 約2 時間半 | 約3 時間 | 約3 時間半 | 4時間 以上 | 平均 |
|--------------|---------------|-----------|------|----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|-----------|------------|
| 受験生 | 13.4 | 9.3 | 11.2 | 22.4 | 13.2 | 13.4 | 7.2 | 5.7 | 1.9 | 2.3 | 1時間 17分 |
| 受験しな かった子 | 19.2 | 16.2 | 20.5 | 23.6 | 11.6 | 4.8 | 2.0 | 0.8 | 0.3 | 1.0 | 52分 |
| 全 体 | 15.9 | 12.4 | 15.2 | 23.0 | 12.4 | 9.6 | 4.9 | 3.5 | 1.2 | 1.9 | 1時間 06分 |

○印は最大値

表22 塾での成績

(%)

| | とても いいほう | わりと いいほう | ふつう | あまり よくないほう | ぜんぜん よくないほう |
|--------------|-------------|-------------|------|---------------|----------------|
| 受験生 | 7.7 | 34.1 | 44.9 | 10.3 | 3.0 |
| 受験しな かった子 | 3.6 | 24.9 | 52.4 | 15.3 | 3.8 |
| 全 体 | 6.8 | 29.9 | 47.4 | 12.6 | 3.3 |

表23 塾に行ってよかったか

(%)

| | とても よかった | わりと よかった | 少し よかった | あまり よくなかった | ぜんぜん よくなかった |
|--------------|-------------|-------------|------------|---------------|----------------|
| 受験生 | 47.7 | 30.0 | 15.0 | 4.7 | 2.6 |
| 受験しな かった子 | 19.8 | 36.9 | 32.2 | 7.3 | 3.8 |
| 全 体 | 34.9 | 34.0 | 22.4 | 5.6 | 3.1 |

○印は最大値

■ 家庭教師と受験生 Ⅲ

次に、家庭教師とのかかわりについて見ていこう。受験生で家庭教師をつけている者は26%で受験しない子の5%を大きく上回っていることは先の表12に示してあるが、通塾率に比べてかなり低い割合である。受験生は4人に1人、受験しない子は20人に1人の割合で家庭教師に見てもらっている計算になるので、小学6年生の児童にはまれな経験に属するものだろう。こうした中で、家庭教師に見

てもらっている受験生は、週1回が26%、週2回が42%、週3回が22%、週4回以上の子も9%おり、週2.3回が平均となる(表24)。受験しない子は週1回が53%で一番多く、平均も週1.7回であるから、受験生のほうが家庭教師に多くたよっていることがわかる。教えてもらう教科は、両者とも算数がトップで、次いで国語の順になるが、受験生は理科を(27%)、受験しない子はその他(英語)を(38%)

表24 家庭教師の回数(週何回見てもらっていたか)

(%)

| | 1回 | 2回 | 3回 | 4回 | 5回 | 6回 | 7回 | 平均 |
|----------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|------|
| 受験生 | 26.4 | 42.4 | 22.2 | 4.2 | 0.6 | 1.4 | 2.8 | 2.3回 |
| 受験しなかった子 | 52.6 | 34.6 | 10.4 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 2.4 | 1.7回 |
| 全体 | 32.8 | 40.5 | 18.5 | 3.1 | 1.0 | 1.5 | 2.6 | 2.1回 |

○印は最大値

表25 家庭教師に教えてもらう教科

(%)

| | 国語 | 算数 | 社会 | 理科 | その他 |
|----------|------|------|------|------|------|
| 受験生 | 53.3 | 93.3 | 13.3 | 27.4 | 9.6 |
| 受験しなかった子 | 43.8 | 71.9 | 9.4 | 3.1 | 37.5 |
| 全体 | 51.1 | 89.4 | 12.2 | 21.7 | 17.2 |

○印は最大値

教えてもらっている割合が高い(表25)。

家庭教師に見てもらい始めた学年は、両者とも大差はなく、5、6年に集中しているが、受験生は4、5年の割合がやや高い(表26)。家庭教師をつけた理由(表27)は、先に示した「塾へ行き始めた理由」と同様、受験生は「受験のため」(87%)で、受験しない子は「学力の一層の向上」(31%)、「予習・復習を中心に」(31%)などが主な理由であった。さらに男女別の比較でみると、男子は中学受験以外の目的で家庭教師をつける者が4割以上もいるが、女子の8割は、はっきりと中学受験のためと答えている。

また、家庭教師についてよかったか(表28)

との問いに対して、「とてもよかった」と答えた受験生は46%で、受験しない子の53%を下回り、「あまり+ぜんぜん」よくなかった子も10%近くいることがわかる。先の塾通いと反対に、受験生の評価が悪いのがおもしろい結果である。たぶん、家庭教師との相性もあろうし、塾通いと二本立てのために苦しい思いをしていたことも考えられる。塾に比べて1対1というメリットが、受験というさしせまった目標のためにかえってデメリットになってしまったケースもあるのだろう。

しかし総じて言えば、家庭教師をつけてよかったと答えた子が「とても+わりと」を含めて、両者とも8割前後に及び、塾よりも評

表26 家庭教師に見てもらい始めた学年

(%)

| | 3年生、または それ以前 | 4年生 | 5年生 | 6年生 |
|----------|-----------------|------|------|------|
| 受験生 | 9.2 | 10.7 | 31.3 | 48.8 |
| 受験しなかった子 | 9.1 | 9.1 | 24.2 | 57.6 |
| 全体 | 9.6 | 10.2 | 28.8 | 51.4 |

表27 家庭教師をつけた理由

(%)

| | 中学 受験のため | 学校の成績 アップのため | 学力の 一層の向上 | 予習・復習 を中心に | その他 |
|----------|-------------|-----------------|--------------|---------------|------|
| 全体 | 67.6 | 5.1 | 12.0 | 10.2 | 5.1 |
| 男子 | 58.4 | 5.9 | 14.9 | 11.9 | 8.9 |
| 女子 | 80.0 | 4.0 | 8.0 | 8.0 | 0.0 |
| 受験生 | 87.1 | 1.5 | 5.3 | 4.6 | 1.5 |
| 受験しなかった子 | 6.3 | 18.8 | 31.3 | 31.3 | 12.3 |

価が高いことがわかる。特に、受験しない子
の場合は顕著で、「とてもよかった」割合が塾
で20%、家庭教師で53%と2倍以上になる。
受験しない子にとっては、学校の勉強を中心
に1対1でじっくりと教えてもらう家庭教師
のほうが、塾のペースよりもずっとわかりや
すく楽しいのであろう。

ちなみに、受験生は、塾と家庭教師に対す
る評価がほぼ等しい数値であった。

最後に、塾や家庭教師以外の学習機関とし
て、通信教育（添削など）の利用状況をたず
ねてみた（図10）。

6年生全体でしていた子は22%、6年生以

前にしていた子は20%、全く経験していない
子が58%である。受験生は、塾や家庭教師の
利用率が高いので、している子は14%、以前
していた子は24%であった。これに対して受
験しない子は27%もしており、受験生の2倍
の利用率である。添削などの通信教育は、本
来の学校の勉強をサポートする形態のもの
が中心であるので、受験をしない一般の小
学生のほうが利用する割合が高いのであろ
う。いずれにせよ、小学生の4割以上が卒業するま
でに、何らかの形で通信教育を利用している
結果が得られている。

表28 家庭教師をつけてよかったか

| | とても よかった | わりと よかった | 少し よかった | あまり よくなかった | ぜんぜん よくなかった |
|--------------|-------------|-------------|------------|---------------|----------------|
| 受験生 | 45.5 | 32.6 | 12.4 | 4.8 | 4.7 |
| | 78.1 | | | | |
| 受験しな かった子 | 53.1 | 28.1 | 12.5 | 6.3 | 0.0 |
| | 81.2 | | | | |
| 全 体 | 46.8 | 31.8 | 12.1 | 5.2 | 4.1 |

図10 6年生のとき、添削や通信教育を受けていたか

| | していた | 以前はしていた | 全くしていない |
|--------------|------|---------|---------|
| 全 体 | 21.7 | 20.3 | 58.0 |
| 受 験 生 | 13.7 | 24.4 | 61.9 |
| 受験しな かった子 | 27.2 | 16.8 | 56.0 |

3. 合否の差異を求めて



■ 合格者のプロフィール IIII

これまでは、受験生のプロフィールや生活の様子などを受験しない子と比較する形で論を展開してきた。そこで、多少気が進まぬ部分もあるが、一步踏み込んだ分析を加えるために、受験生を合格者と不合格者に分類して、様々な角度から差異を明らかにしていくことにしたい。そうした結果から、今後受験する子をもつ親や教師の合否判定の参考にもなれば幸いである。

まず表29をご覧ください。受験生全体で合格した者は62%、不合格者は38%である。男女別の合格者の割合は、男子52%に対し女子は71%と2割近く女子が多く、男子に比べて多少広き門のようである。

女子の合格率が高いためか、受験してよかったと答えた者も、男子の63%に対し女子は74%もある(表30)。当然のことではあるが、

合格者の8割は受験してよかったと答えており、不合格者の53%を大きく上回っている。

また、表31は受験校数を示している。全体では、1人平均2.9校受験し、5校以上受験する子も11%いる。男女別では、女子2.6校に対し男子3.2校と、男子の狭き門を証明する結果である。合格者は3.0校、不合格者は2.8校と大差はないものの、やや合格者のほうが受験校数が多くなっている。

次に中学受験を決めた理由を見てみよう(表32)。全体では、「高校や大学への進学が楽だから」(56%)、「自分から強く希望して」(48%)、「もっと勉強して、自分の力を伸ばしたいから」(46%)などの理由が上位にきている。これを男女別で比較してみると、男子は「将来、よい職業につきたいから」(48%)、「有名な私立・国立中学だから」(34

%)、「両親に強くすすめられたから」(39%)などの項目の割合が高く、女子は「自分から強く希望して」(54%)の割合が高い。両親にすすめられて受験する男子に対して、女子は自分の意志で受験する傾向が強く、この時期の女子の精神的な成長ふりを感じる結果である。

さらに合格者と不合格者を比較すると、合格者は「自分から強く希望して」(56%)、「もっと勉強して、自分の力を伸ばしたいから」(50%)、「公立中学はあまり環境がよくないから」(38%)などの項目の割合が高いが、不合格者は「高校や大学への進学が楽だから」(60%)、「両親に強くすすめられたから」(43%)といった理由で受験する傾向が強い。つまり、合格者は自分の希望で受験する傾向が強いが、不合格者は他人(親)の意志によって受験する傾向が強い。そしてこの差が、学力を含めて合否を決める要因のひとつと考えられる。言いかえれば、受験を決める時点で、本人が最後までがんばれるかどうかを親子でよく話し合い、無理やり受験させるのではな

く、本人の希望を十分尊重させた形で受験に臨む姿勢が要求されよう。そうした配慮が十分なせる親に、はじめて子どもを受験させる資格があるとも言えるだろう。

では、受験勉強を始めるのはいつごろからなのであろう。表33によれば、4年生から始める子は33%、5年生から始める子も33%で、男女差はなく平均4.6学年という計算が成り立つ。ただし、合格者は4年生までに56%が始めており、平均でも4.4学年と、不合格者に比べて先手を打って受験勉強を開始していることがわかる。

同様に塾に行き始める学年も、合格者は4年生からが一番多く43%であるが、不合格者は5年生からが39%で一番多い(表34)。「3当4落」とまではいかないまでも、「4当5落」くらいまでは現実になりつつあるようだ。

最後に、6年生進級当初、受験意志がはっきりしていたかどうかを表35に示してみた。合格者の62%は「ぜったい受験するつもりだった」と答えており、不合格者の31%を大きく上回っている。また不合格者の37%は「あ

表29 受験に合格したか

(%)

| | 全体 | 男子 | 女子 |
|-----|------|--------|------|
| 合格 | 61.6 | 52.0 < | 71.0 |
| 不合格 | 38.4 | 48.0 > | 29.0 |

表30 受験してよかったか

(%)

| 全体 | 男子 | 女子 | 合格者 | 不合格者 |
|------|--------|------|--------|------|
| 68.4 | 62.9 < | 73.6 | 79.8 > | 52.6 |

「とても+わりと」よかった割合

まり+まったく」受験する気はなかったと答えており、受験に対するあいまいな気持ちをいだきつつ受験勉強に取り組んでいた様子がかえらる。先の表32にも示した通り、受験

をするかしないかを早い時期にはっきりさせて、しっかりした目標をもって受験に取り組むことが大切であろう。

表31 受験した校数

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 合格者 | 不合格者 |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 校 | 16.1 | 13.3 | 18.7 | 11.0 | 22.6 |
| 2 校 | 23.9 | 18.6 | 29.0 | 25.0 | 22.6 |
| 3 校 | 32.3 | 30.8 | 33.7 | 33.4 | 31.0 |
| 4 校 | 16.9 | 20.0 | 14.0 | 18.0 | 13.6 |
| 5 校 | 7.7 | 12.3 | 3.3 | 9.3 | 5.2 |
| 6校以上 | 3.1 | 5.0 | 1.3 | 3.3 | 5.0 |
| 平 均 | 2.9校 | 3.2校 | 2.6校 | 3.0校 | 2.8校 |

○印は20%以上のもの

表32 中学受験を決めた理由

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 合格者 | 不合格者 |
|-------------------------|------|------|---------|------|---------|
| 1. 高校や大学への進学が楽だから | 56.4 | 58.4 | 54.5 | 54.2 | < 59.9 |
| 2. 自分から強く希望して | 48.3 | 42.9 | < 53.5 | 56.4 | >> 35.7 |
| 3. もっと勉強して、自分の力を伸ばしたいから | 45.8 | 49.2 | > 42.6 | 50.0 | > 38.8 |
| 4. 将来、よい職業につきたいから | 37.0 | 47.7 | >> 26.5 | 37.6 | 36.1 |
| 5. 両親に強くすすめられたから | 33.9 | 38.7 | > 29.3 | 29.1 | << 42.5 |
| 6. 公立中学はあまり環境がよくないから | 33.3 | 33.9 | 32.7 | 38.2 | > 25.6 |
| 7. 有名な私立・国立中学だから | 27.7 | 33.5 | > 22.8 | 31.6 | > 22.2 |

「とても+わりと」その割合
不等号は5%単位の差を表す

表33 受験勉強を始めた時期

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 合格者 | 不合格者 |
|------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 6年生 | 18.7 | 19.0 | 18.4 | 13.5 | 26.7 |
| 5年生 | 32.9 | 30.8 | 34.9 | 31.0 | 36.1 |
| 4年生 | 32.8 | 33.3 | 32.4 | 37.6 | 25.7 |
| 3年生 | 12.2 | 11.4 | 13.0 | 14.9 | 8.6 |
| 2年生 | 1.4 | 1.7 | 1.0 | 0.6 | 2.4 |
| 1年生 | 0.5 | 0.7 | 0.3 | 0.9 | 0.0 |
| それ以前 | 1.5 | 3.1 | 0.0 | 1.5 | 0.5 |
| 平 均 | 4.6学年 | 4.6学年 | 4.6学年 | 4.4学年 | 4.8学年 |

○ 印は最大値

表34 塾に行き始めた学年

(%)

| | 6年生 | 5年生 | 4年生 | 3年生 | それ以前 |
|------|------|------|------|------|------|
| 合格者 | 8.3 | 28.0 | 42.8 | 16.9 | 4.0 |
| 不合格者 | 11.8 | 39.2 | 31.7 | 10.8 | 6.5 |

○ 印は最大値

表35 6年生のはじめのころの受験意志

(%)

| | ぜったい 受験するつもり | かなり 受験するつもり | あまり受験 する気はなかった | まったく受験 する気はなかった |
|------|-----------------|----------------|-------------------|--------------------|
| 合格者 | 62.0 | 20.6 | 12.8 | 4.6 |
| | 82.6 | | | |
| 不合格者 | 31.3 | 31.7 | 31.3 | 5.7 |
| | 63.0 | | | |

■ 合格者の学習状況 IIII

では、合格者と不合格者の間には、成績や学習時間、学習態度などに大きな差が認められるのであろうか。まず、表36をご覧ください。これは2学期の帰宅後の学習時間が多いときでどのくらいであったかをたずねたものである。全体では平均4.6時間で、6時間以上している子も24%いる。男女別でみると3～6時間の範囲では女子のほうが男子を上回っているが、男子の3割は6時間以上も勉強しており、そのため平均4.7時間と女子の4.5

時間をわずかに上回っている。これは、女子よりも狭き門であるために、勉強時間に直接影響があらわれたのであろうと考えられる。

また、合格者と不合格者を比べると、平均時間では差が認められないものの、7時間以上勉強するモーレッツな子が合格者が19%、不合格者が8%、3時間以下の者は合格者が16%で、不合格者が29%といった差がはっきりとあり、受験勉強に対するやる気のようなものが、合格者側に強く感じられる結果であっ

表36 帰宅後の学習時間（多いとき）

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 合 格 者 | 不 合 格 者 |
|-------|------|--------|------|--------|---------|
| 1時間以内 | 3.7 | 4.1 > | 3.3 | 3.5 < | 3.8 |
| 1～2時間 | 5.1 | 5.2 > | 5.0 | 3.2 < | 8.0 |
| 2～3時間 | 12.7 | 14.1 > | 11.4 | 9.7 < | 16.9 |
| 3～4時間 | 15.6 | 13.8 < | 17.4 | 16.7 > | 14.6 |
| 4～5時間 | 20.3 | 15.2 < | 25.2 | 19.9 < | 21.0 |
| 5～6時間 | 18.5 | 17.2 < | 19.7 | 19.4 > | 17.8 |
| 6～7時間 | 9.5 | 12.1 > | 7.0 | 9.1 < | 9.9 |
| 7時間以上 | 14.6 | 18.3 > | 11.0 | 18.5 > | 8.0 |

○印は15%以上のもの

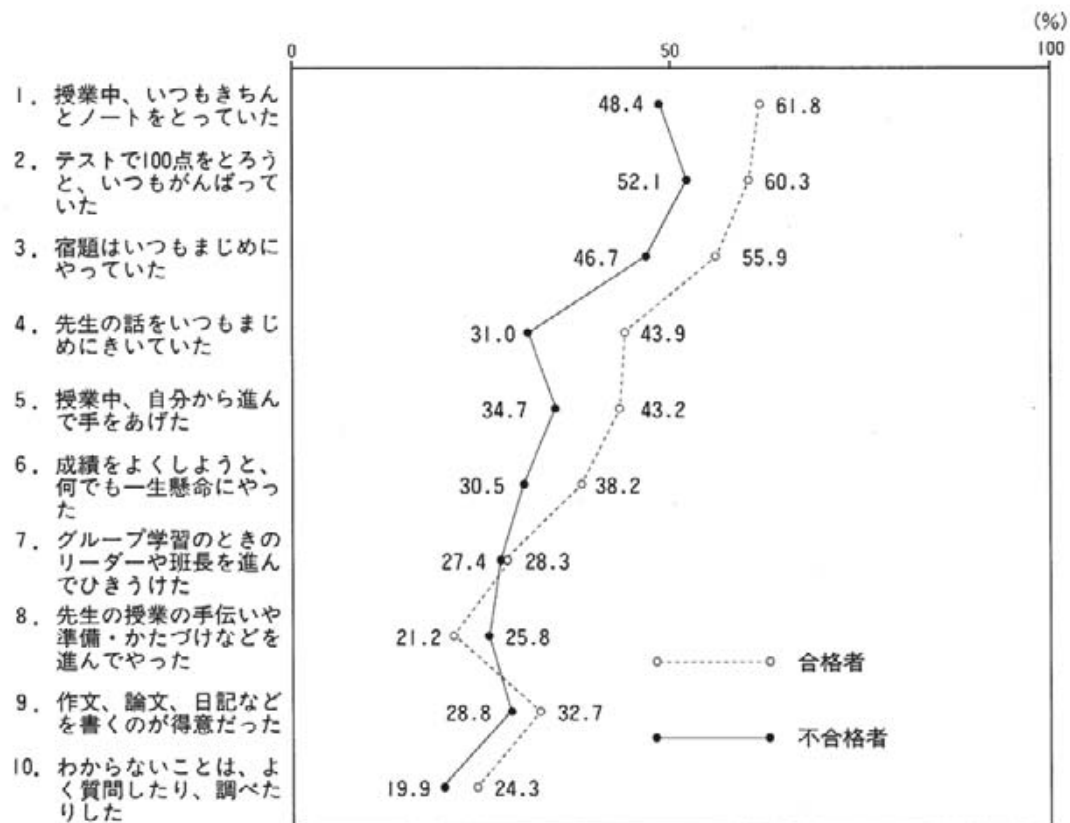
| | | | | | |
|-----|-------|---------|-------|-------|-------|
| 平 均 | 4.6時間 | 4.7時間 > | 4.5時間 | 4.6時間 | 4.6時間 |
|-----|-------|---------|-------|-------|-------|

た。

ここでもう一度、学校の授業場面に話を戻してみよう。図11は6年生のこれまでの学習態度を示したものであるが、合格者と不合格者では、明らかに大きな差が認められる。10の質問項目のうち、不合格者のよかったものは「先生の授業の手伝いや準備・かたづけなどを進んでやった」の1項目だけで、残りの9項目は全て合格者の日ごろの学習態度のよさを示すものばかりである。つまり、合格者は帰宅後の受験勉強をがんばるだけでなく、毎日の学校の授業に対しても、まじめで意欲的に取り組む姿勢が強いことがわかる。

こうした結果は、当然、学校の成績にも影響されようし、内申書等の記述もよい内容のものになるので、合格率もぐんと上がることが予想される。事実、表37が示すように、合格者は学校の成績全般及びいわゆる主要4教科の成績に関しては圧倒的に不合格者を上回っており、塾の成績にしても同様な結果であった。しかもおもしろいことに、学校の成績と塾の成績のよさの割合がほぼ一致しており、子どもの実力（学力）に対する評価は、だれがみてもあまり変わらないということなのであろう。

図11 6年生の学習態度



「とても+わりと」その割合

表37 成績のよさ

(%)

| | 合格者 | 不合格者 |
|------------------------|------|------|
| 1. 学校の成績が「とても+わりと」いい割合 | 51.0 | 25.0 |
| 2. 国語の成績が「とても+わりと」いい割合 | 69.4 | 45.5 |
| 3. 算数の成績が「とても+わりと」いい割合 | 75.7 | 52.1 |
| 4. 社会の成績が「とても+わりと」いい割合 | 60.8 | 38.9 |
| 5. 理科の成績が「とても+わりと」いい割合 | 58.4 | 32.9 |
| 6. 塾の成績が「とても+わりと」いい割合 | 52.6 | 28.3 |

不等号は5%単位の差を表す

■ 受験を通しての経験 III

こうした受験勉強により、生活全体が成績にふりまわされたり、人間関係を悪くすることも少なくないだろう。というのも、わずか12歳の子どもに体験させるには少々ハードなものかもしれないからだ。そこで当事者である子どもたちが受験を通してどう考え、どう変わったかなどについてたずねてみたので、その結果を紹介していくことにしよう。

まず表38は受験することで（学校やクラス内で）困ったことをたずねたものである。第一に目につくのが「受験する学校をクラスの人に知られないように」という配慮であった。確かに受験生の中には、受験前からクラスメイトや担任には受験校はもとより、受験するということが全くふせておいて、突然内申書を書いてほしいという者もいるので、こうした配慮はかなり一般的なもののなかであろう。しかもクラスによっては、受験する中学の名

前や合格した中学のレベルによって友だちづきあいも変わってしまうケースも多いために、合格後も自分の行く中学校の名前を卒業式の日まで知らせないようにと担任に頼む子もいると聞く。何も悪いことをしているわけではないのだから、もう少しオープンに堂々としているほうが本来ふさわしいもののような気がするのだが、合否の結果にこだわりすぎたり、受験しない子に対して後ろめたさをもったりしているようであり、全体の46%がそうしたことで困っていた（配慮していた）となれば気にかかる結果である。そうした傾向は男子より女子のほうが強く、この時期の女の子の微妙な心理をあらわす結果であろう。

また、他にも「受験する仲間で、グループをつくるが多かった」（28%）、「ガリ勉などと言われて困った」（12%）をはじめ、「一緒に遊ぶ仲間がいなくて困った」（11%）、「受

験しない子から、仲間はずれにされることがあった」(9%)などといった、受験による仲間はずれやグループ化の傾向が1割ほど見られ、受験勉強に加えてクラスの友人関係に悩む子も少なくないようである。しかもこうした傾向は合格者に強く見られ、受験後の結果によって不合格だった子とのトラブルも考えられる。こうしたことが起こらないように親や教師が、受験する子にもしない子にも合格した子にもしなかった子にも、事前に十分注意しておく必要がある時代が来たのだろう。というのも、以前は受験と言えば合否にまつわる受験する子だけの問題であったが、現在は受験する子の数が3~4割にも及び、受験しない子の受験に対する応じ方も教育していく必要が生じているからだろう。男女差別同様、受験差別が起こらぬよう、教師が中心となり子どもに指導していく時代なのであろう。

これまで見てきたように、受験生は、受験

を通して困った経験もかなりあり、表39が示すように実生活の中では、「テレビやマンガ」(39%)、「友だちとの遊び」(51%)をかなりがまんしているようだが、受験によって得られたプラス面での経験も少なくないだろう。そこで今度は、受験を通して自分がどう変わったかをみていくことにしよう(表40)。

まずメリットとしてあげるならば、「学校以外の友だちが増えた」(66%)、「知識が豊富になった」(62%)の2点が際立っており、全体の6割以上を示している。「勉強が楽しくなった」(33%)、「忍耐強くなった」(26%)は全体の2~3割で、こうしたものは、受験によってあまり得られるものではないようだ。また当然のことであるが、合格者は、不合格者に比べ受験をプラスに見る傾向にあることがわかる。しかし、体力の衰えや体調の悪化を訴える者も合格者のほうに多く、しかもそれは男子のほうが高率である。これは、先に示

表38 受験することで困ったこと

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 合 格 者 | 不 合 格 者 |
|----------------------------------|------|------|--------|-------|---------|
| 1. 自分の受験する学校を、クラスの人に知られないようにしていた | 46.3 | 43.5 | < 49.0 | 48.5 | 50.2 |
| 2. 受験する仲間で、グループをつくるが多かった | 28.2 | 29.9 | 26.4 | 33.9 | > 24.2 |
| 3. クラスのみんなからちょっと尊敬されていた | 27.6 | 25.6 | 29.7 | 30.6 | > 22.3 |
| 4. ガリ勉などと言われて困った | 11.5 | 14.7 | > 8.5 | 16.4 | > 6.5 |
| 5. 一緒に遊ぶ仲間がなくて困った | 10.7 | 12.3 | 9.2 | 11.4 | 11.2 |
| 6. 受験しない子から、仲間はずれにされることがあった | 8.6 | 11.0 | 6.3 | 9.4 | 6.5 |

「とても+わりと+少し」その割合

したように、男子は狭き門ゆえに、遊びを切り捨てハードな勉強をしている子が多かったので、こうした結果となってあらわれたのだろう。

もう一度確認しておくが、受験生の20%は体力の衰えを感じ、14%は体調をこわしやすくなったという現実を、われわれはどうとらえたらよいのだろうか。

表39 受験のためにがまんしていたこと

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 合格者 | 不合格者 |
|-----------------------|------|------|--------|------|--------|
| 1. テレビやマンガを見るのがまんしていた | 39.3 | 41.0 | 37.5 | 42.3 | > 36.4 |
| 2. 友だちと遊ぶのがまんしていた | 51.4 | 53.8 | > 49.0 | 54.3 | > 47.9 |

「とても+わりと」がまんしていた割合

表40 受験を通して自分が変わったこと

(%)

| | 全 体 | 男 子 | 女 子 | 合格者 | 不合格者 |
|-------------------|------|------|--------|------|--------|
| 1. 学校以外の友だちが増えた | 66.1 | 60.8 | < 71.3 | 75.9 | ≫ 51.7 |
| 2. 知識が豊富になった | 61.5 | 63.6 | 59.5 | 69.1 | ≫ 52.1 |
| 3. 勉強が楽しくなった | 33.2 | 34.3 | 32.1 | 39.9 | ≫ 23.6 |
| 4. 忍耐強くなった | 26.3 | 28.1 | 24.5 | 32.5 | ≫ 17.0 |
| 5. 運動能力（体力）がおとろえた | 20.3 | 21.4 | 19.4 | 23.6 | > 15.2 |
| 6. 体調をこわしやすくなった | 14.4 | 17.2 | > 11.7 | 16.2 | 11.9 |

「とても+わりと」そう思う割合
不等号は5%単位の差を表す

■ 合格者の未来像 III

最後に、この章をまとめる形で、合格者の未来像を探ってみることにしよう。

まず、図12はこれから行く中学は楽しみかどうかをたずねたものである。合格者の中には自分の希望する中学へ入れなかった者もあるだろうし、行きたくない私立中学へ行かされる子もいるだろうが、全体としては52%が中学を「とても楽しみ」と答えている。「わりと楽しみ」までを含めると全体の72%にも及ぶ。しかし、10%の子が「(あまり+ぜんぜん)楽しみでない+行きたくない」と答えており、

せっかく受験して合格したのに、なんとも気の毒でならない。これには様々な原因が考えられようが、自らの努力で楽しい中学生活にしてほしいものである。また、不合格者の場合は当然のことであるが、近くの公立中学へ行くことになるので、中学が楽しみと答えた者は合格者に比べてかなり少なく、全体のちょうど5割にあたる。しかも行きたくない者は、全体の4分の1にあたる26%にも及んで

図12 中学は楽しみか

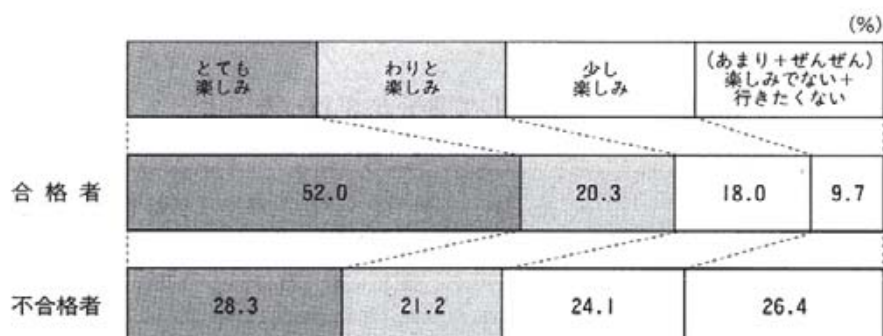


表41 将来の進路

(%)

| | 中学・高校まで | 短大か専門学校 | ふつうの大学 | むずかしい大学 |
|------|---------|---------|--------|---------|
| 合格者 | 1.5 | 13.3 | 33.6 | 51.6 |
| 不合格者 | 7.1 | 11.4 | 47.7 | 33.8 |

○印は最大値

いる。こうした結果を目のあたりにすると、受験する以上はとにかく合格させねばならないと思うのは親や筆者だけではないだろう。さらに、こうした結果の反映であろう、将来の進路や職業希望に対しても両者には大きな差が認められる。例えば、表41の進路希望を比較すると、合格者の85%は4年制の大学を希望し、その中の52%は、いわゆる一流のむずかしい大学へ進学したいと考えている。それに対して、不合格者は48%がふつうの大学、34%がむずかしい大学、7%が中学か高校までとしており、合格者よりも達成目標が低く、チャレンジ精神に欠ける傾向がある。

しかも、それは将来の職業選択に対しても、少なからぬ影響を及ぼしていることが表42よ

り明らかである。というのは、合格者が医者、裁判官、大学教授といった高学歴が必要な職業を希望する割合が高いのに対して、不合格者はサラリーマンを希望する割合が高いからである。たった1度の失敗のために、ここまで自分を悲観的にとらえなくてもいい気がするし、中学・高校と進む中で自分の力や未来が開けていくことに自信をもってほしい気がした。実際、社会へ出ると、ほとんどの職業は学歴よりも実力ややる気、行動力が大切なことは事実であるし、今後、そうした傾向が強まっていくのだから。たった1度の失敗を将来の自分にまでひきずる受験はさけないものである。

表42 将来の職業

(%)

| | 合格者 | | 不合格者 |
|--------------|------|---|------|
| 1. 大きな会社の社長 | 23.5 | | 23.4 |
| 2. 医 者 | 35.5 | » | 20.1 |
| 3. 小学校の先生 | 35.7 | > | 28.9 |
| 4. サラリーマン | 13.7 | « | 25.5 |
| 5. コンピュータの技師 | 19.9 | | 21.5 |
| 6. テレビタレント | 12.9 | | 12.8 |
| 7. 芸術家 | 17.2 | | 16.1 |
| 8. パイロット | 8.6 | | 8.7 |
| 9. 裁判官 | 21.5 | » | 9.4 |
| 10. 大学教授 | 21.5 | » | 10.1 |

不等号は5%単位の差を表す



まとめに代えて

中学受験がある特定の子どもたちを対象にしていた時代が終わり、一般化の傾向にあることがわかってきた。都市部では3～4割にも及ぶ受験率を示し、夜の10時すぎまで塾通いをする子の姿を見ることは珍しくないし、そうした子は1日3～4時間塾で勉強した後、帰宅後も深夜近くまで宿題や受験勉強に取り組んでいる。そのため、起床時刻も遅くなり、睡眠不足のまま学校へ通い、頭や体がスッキリしないまま、午前中を過ごしていると聞く。学校が終わるころには体調もよくなり、いざ本番の勉強がまっている塾へ急ぐのであろう。

こうした生活をほぼ2年間にわたり継続して臨む中学受験であるが、合格率はほぼ6割、第1志望の学校に入れる子は3割にも満たないであろう。友だちとのつきあいも勉強中心で、放課後に仲間と外で元気に遊ぶ姿は、彼らからは無縁のものとなり、勉強は、いわゆる主要4教科の受験科目のみをみがきあげた優等生で、その他のものは取りあえず後まわしという生活であろう。

こうした受験生の生活を見ていると、われわれの時代とは隔世の感があり、気の毒に思えてならない。時代がちがうと言えればそれまでだが、本当にこうした生活を11～12歳の子

どもにさせていいものか疑問に思えてならない。

本来、この時期の子どもたちは、十分な遊びと睡眠と人間関係を基礎に、ゆっくりと成長していくことが望ましいのであろう。加えて、子どもらしさといわれる、「万能感」や「勢い」「未来志向」「自己回復力」といったものが、ひとりひとりの子どもからほとぼしるようではなくてはならないはずである。しかし、どうやら受験をめぐる子どもたちの生活からは、本来の子どもらしさを見ることは不可能に近く、さしずめ、おとな社会もしくは学歴社会の妄想に取りつかれた「子ども時代を失った子どもたち」の姿が見えてきた。こうした子どもたちが現在幸福であるかどうかはわからないが、私たちおとなはもう一度小学生に戻り、彼らと同じような生活をしたいとは思わないのではないか。多くの学者が指摘するように、スピード化、情報化、都市化が進む社会の中で、子どもたちははだいに孤立化、無気力化の傾向を示し、安心した子ども時代を過ごすことができなくなってきていることは事実だが、そうした中での受験化の傾向は一層、子どもたちの豊かな時代をおびやかす存在となりそうである。